2014年度　ひと花プロジェクト
調査報告

稲田七海（大阪市立大学 都市研究プラザ 特別研究員）

はじめに

2014年度はひと花センターが開設して２年目にあたる年です。開設した2013年度から登録者が増加し、プログラムへの参加者も2013年度（７月～３月）の利用延べ人数7,604人、プログラム実施回数807回から、2014年度の利用延べ人数12,098人、プログラム実施回数1,542回へと、大幅に増加しました。また、プログラムの中でも特に地域と関わりをもつ社会参加プログラムや地域活動が増えてきたこともあり、ひと花センターの近隣地域と関わる機会も2013年度と比較すると大きな変化がありました。

そこで、2014年度のひと花プロジェクト調査では、2013年度と同様のひと花センター登録者への実態調査に加えて、ひと花センターと関わりのある地域の方々を対象に、ひと花センターの取組み等に関する意識調査を実施しました。地域の人たちが、ひと花センターでの取組みや登録者に対してどのような印象を持ち、活動をどう評価しているのかについて、アンケート形式で回答してもらいました。以下、調査の概要について説明した後に、それぞれの調査の集計結果と分析結果について報告します。

Ⅰ．ひと花センター登録者実態調査について

■調査の概要「ひと花センター登録者実態調査」

１）調査の目的

本調査は、ひと花センター登録者の属性を把握し、利用状況や利用後の変化について明らかにすることを目的としています。

２）調査対象者

調査対象者は、ひと花センター登録者です。登録者は、①日常的に利用している人（常用）と②以前は利用していたが現在はほとんど利用していない人（常用外）、③登録のみで全く利用していない人（登録のみ）に分類できます。今回調査対象となるのは、①の常用と②の常用外に該当する66名です。この66名のうち、男性は65名、女性は１名、平均年齢は71.3才です。

３）調査方法

面接を行い質問紙にそったアンケート形式による調査を実施しました。面接調査はひと花センターにおいて、主にひと花センター職員が担当しました。また、一部訪問による調査も実施しています。

４）調査期間

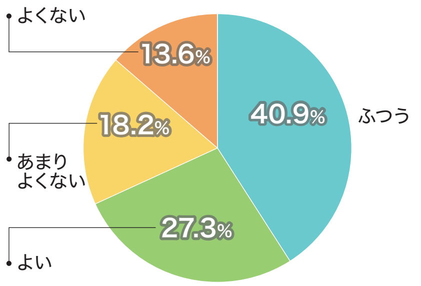
2015年３月

１．健康に関すること

① 最近（ここ２～３ヶ月）の健康状態について

最近（ここ２～３ヶ月）の健康状態についてたずねました。40.9％の人がふつうと回答しており、よいと回答した人は27.3％です。一方で、あまりよくない、よくないと回答した人は合計で31.8％確認できます（図１－１）。

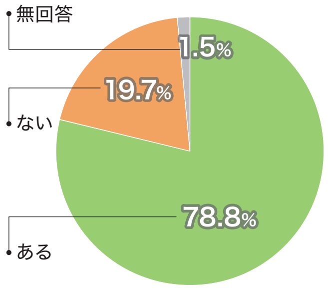
図1－1　最近の健康状態



② 持病の有無

持病に関しては、78.8％の人が持病ありと回答しています（図１－２）。持病がある人うち、84.2％が通院しています。持病のある人に病名をたずねたところ、３割の人に高血圧症や脳梗塞の後遺症、狭心症などの循環器系の慢性的な症状があることがわかりました。その他に、消化器系の持病が15％程度、糖尿病などの代謝障害は10％程度確認できました。

図1－2　持病の有無



持病があり、通院している人は84.2％、通院していない人が15.8％です（図１－３）。このうち、通院の回数は月に１回程度が半数以上の52.1％となっており、２～３回が20.8％、４～５回が14.6％と続きます。10回以上通院する人も6.3％確認できます（図１－４）。

図1－3　通院の有無

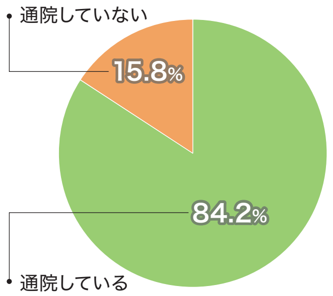
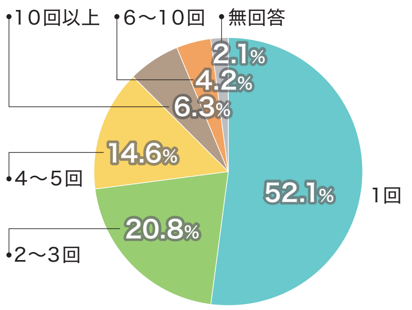


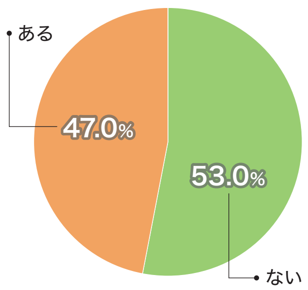
図1－4　1ヶ月の通院回数



③ 体の不自由について

持病として明確な診断は受けていないものの、日常的に身体に不自由を感じている人は47.0%確認できます（図１－５）。

図1－5 体に不自由を感じる

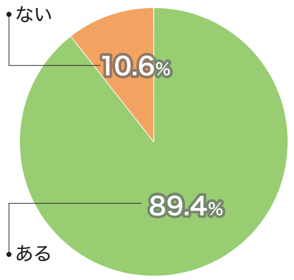


具体的にどのような不自由を感じているのか自由に答えたもらったところ、手足のしびれや筋力の衰え、体力低下、頻尿、視力低下などが確認されました。病院で受診してもらうほどではないものの、加齢に伴う心身の機能低下が少しずつ現れてきていることがうかがえます。

④ 心身の健康を保つための予防、心がけ

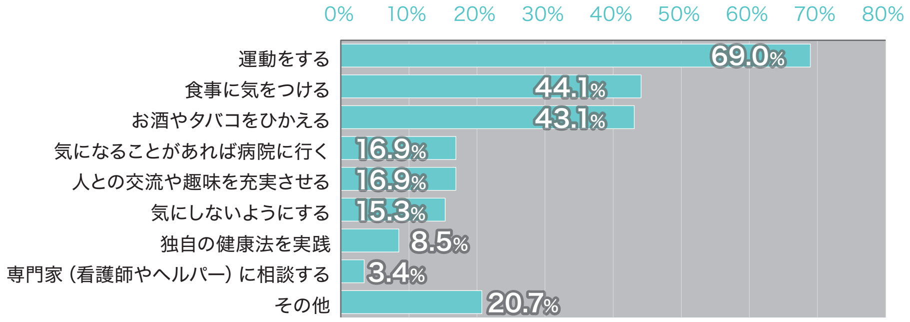
心身の健康を保つために何らかの予防的な取組みを行っている人は、９割に近い89.4%確認できます（図１－６）。

図1－6 心身の健康への予防的対策



具体的な予防法としては、上位３番目までが、運動をする（69.0%）、食事に気をつける（44.1%）、お酒やタバコを控える（43.1%）となっています（図１－７）。また、気になることがあれば早めに受診する（16.9%）といったように、症状が重篤化しないための予防的な行動も確認できます。また、人との交流や趣味を充実させる（16.9%）、気にしないようにする（15.3%）といったように、健康に対して過度に不安がらずに日々の生活を充実させる傾向にあることも読み取ることができます。

図1－7 健康を保つための心がけ

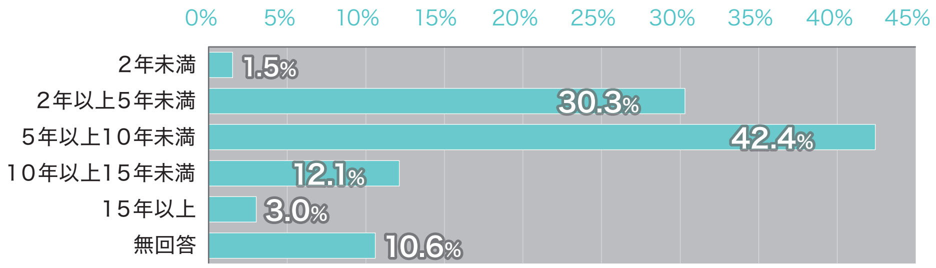


２．生活保護やお金のことについて

① 生活保護受給期間

調査対象者の生活保護の受給期間は、５年以上10年未満がもっとも多く（42.2%）、続いて２年以上５年未満（30.3%）となっており、７割以上が10年未満となっています。一方、10年以上受給している人は、10年以上15年未満が12.1%、15年以上が3.0%となっています（図２－１）。

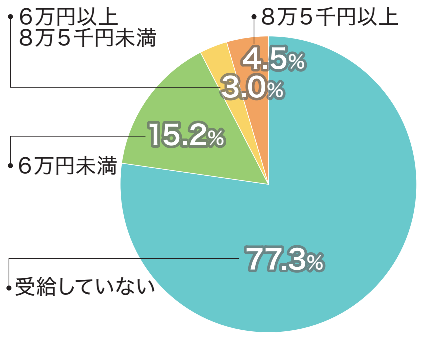
図2－1 生活保護受給期間



② 年金の受給

調査対象者のうち、22.7%が年金を受給しています。１ヶ月の年金の受給額は、６万円未満が15.2%、６万以上８万５千円未満が3.0%、８万５千以上が4.5%となっています（図２－２）。年金を受給している人は生活保護と併用して生活費の不足分を補っています。

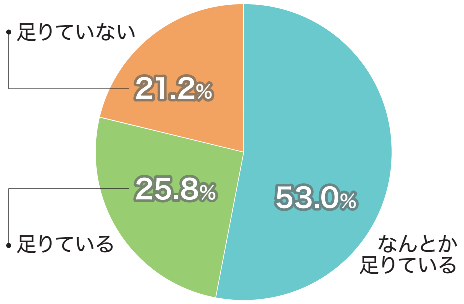
図2－2 年金受給の有無



③ お金は足りているか

月々のお金についてたずねたところ、なんとか足りているが53.0%となっており、半数以上の人が生活保護費や年金などをやりくりしながらなんとか生活することができていることがわかります。足りているが25.8%、21.2%が足りていないと回答しました（図２－３）。

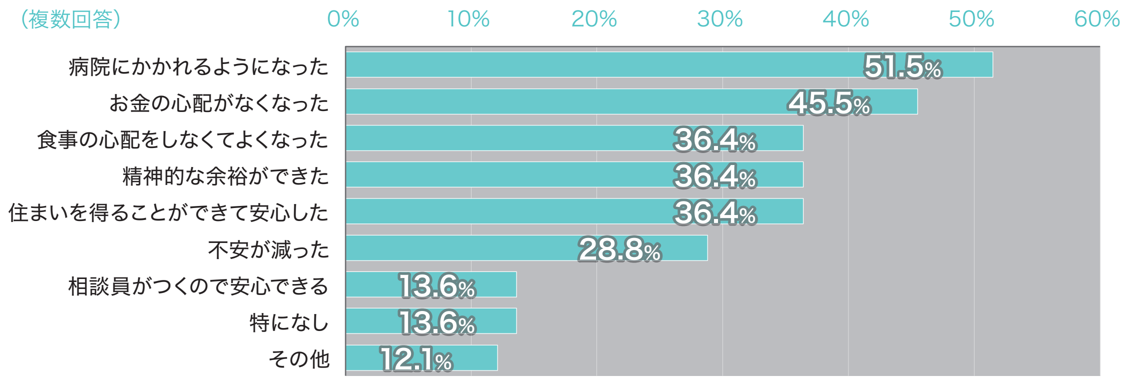
図2－3 お金は足りているか



④ 生活保護受給後の気持ちや意識の変化

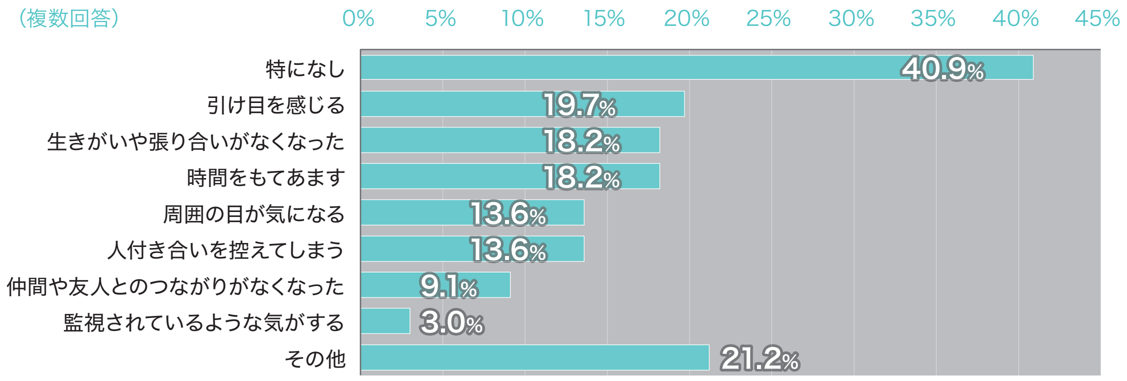
生活保護を受給してよかったこと、よくなかったことそれぞれたずねてみました。まず、生活保護を受給してよかったことは、半数以上の人が病院にかかれるようになった（51.1％）を挙げています。この次に、お金の心配が無くなった（45.5％）、食事の心配をしなくてよくなった（36.4％）、精神的な余裕ができた（36.4％）、住まいを得ることができて安心した（36.4％）、が続きます。その人の生存の根源的な部分を、生活保護受給によって支えることが可能になったことがわかります。また、その他として、自暴自棄が減った、他の家族に気を使わなくてよかった、お金のありがたみがわかるようになった、などの回答が得られました（図２－４）。

図２－４ 生活保護を受給してよかったこと



一方で、生活保護を受給してよくなかったことは、特になしと答えた人が４割を超えます。これに、生活保護を受給することで、引け目を感じる（19.7％）が続きます。同様に、周囲の目が気になる（13.6％）、人付き合いを控えてしまう（13.6％）、といったように、生活保護を受給することへの否定的な考えが、その人自身のふるまいや人との接し方を萎縮させていることがうかがえます。上位３番目以下は、生きがいや張り合いが無くなった（18.2％）、時間を持て余す（18.2％）、仲間や友人とのつながりがなくなった（9.1％）が確認できます（図２－５）。これまで、仕事中心の生活や、野宿生活などでの仲間と支え合う生活から、生活保護を受給する生活に移行する中で、仕事に代わる活動や時間の使い方や人とのつながりなどが十分に構築できていない様子がうかがえます。

図２－５ 生活保護を受給してよくなかったこと



⑤ お金の無駄遣いを防ぐ心がけや工夫

83.3％の人がお金の無駄遣いをしないための工夫を行って生活費をやりくりしています（図２－６）。やりくりのなかで、多くの人が自炊する（67.9％）と答えています。これに４割以上の人が安売りのお店で買い物をする（41.1％）が続き、３割以上の人がお酒ギャンブルをひかえる（33.9％）と答えています（図２－７）。食費や生活必需品などの、生活に必要な消費材を節約しているほか、お酒、ギャンブルのほか、嗜好品、趣味娯楽などをひかえる傾向も強くみられます。また、お金の使い方として、一日に使える金額を決めていたり、必要以上の現金を持ち歩かない、家計簿をつける、などの工夫をしていたり、金銭管理を頼んでいる人も確認できます。

図２－６ お金を無駄遣いしないための工夫

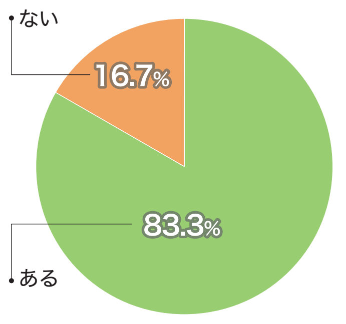
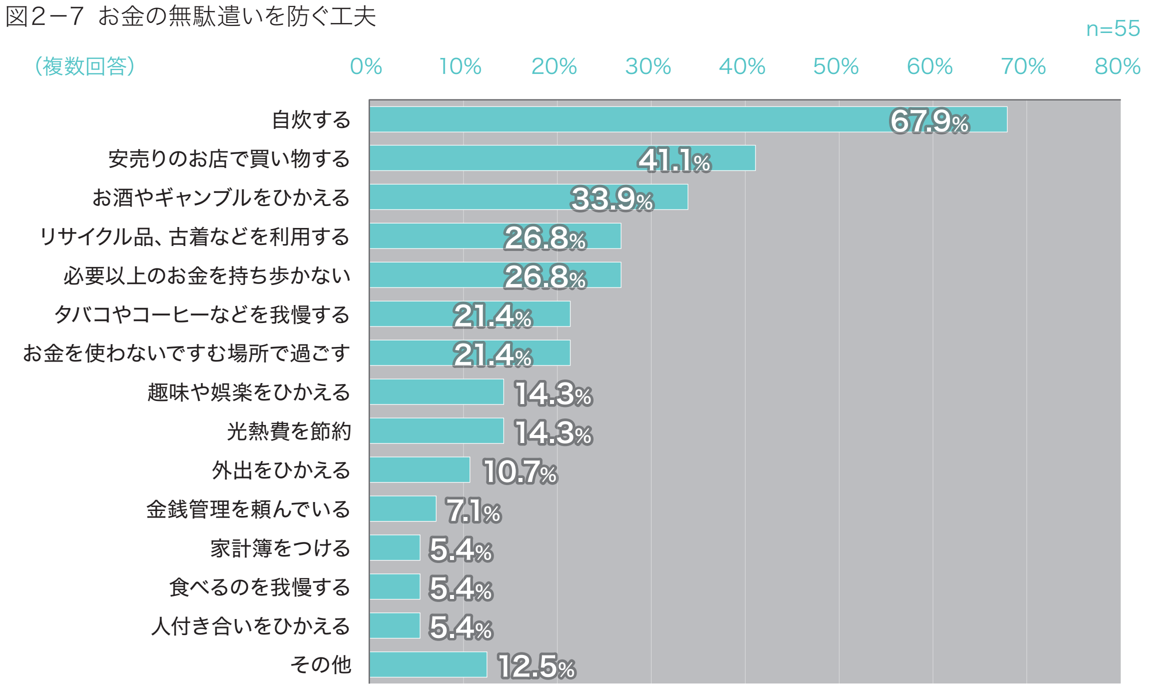


図２－７ お金の無駄遣いを防ぐ工夫

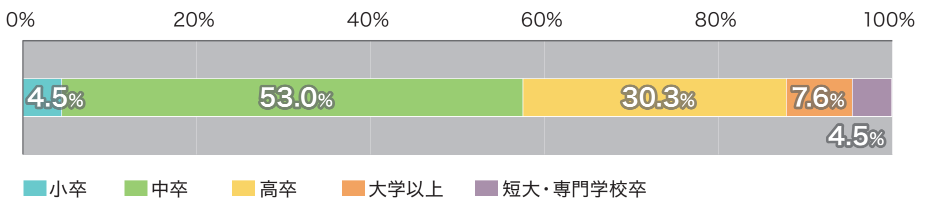


3．学歴・仕事

① 最終学歴

最終学歴でもっとも多いのが中卒で、半数以上の53.0％を占めます。高卒が30.3％と続き、大学や短大・専門学校などの高等教育機関を卒業した人は、12％程度となっています（図３－１）。

図３−１ 最終学歴



② 過去の最長職

登録者の最長職で最も多いのが、建設作業従事者（31.8％）です。これに続くのが建設技能従事者（15.2％）で、建設関連の仕事についていた人が半数近い47％を占めています（図３－２）。この他、工場労働従事者やサービス業従事者の割合が若干高くなっています。また、最長職時の雇用形態をたずねたところ、約４割が正社員と回答しています（図３－３）。これに続くのが日雇労働（25.8％）で、契約・嘱託社員（22.7％）、パートアルバイト（4.5％）です。これら非正規の不安定な雇用形態で仕事をしていた人は半数を超えています。

図３−２ 最長職

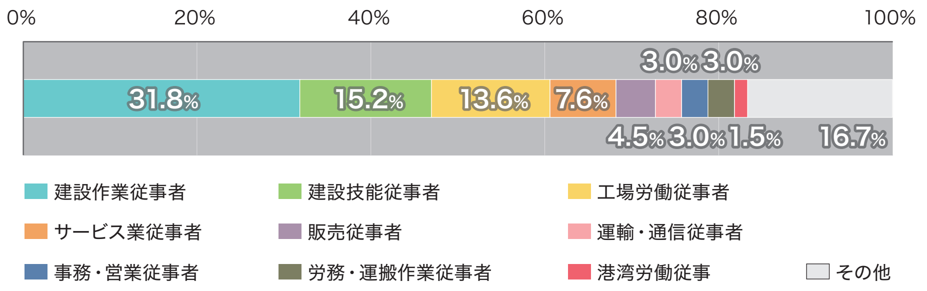
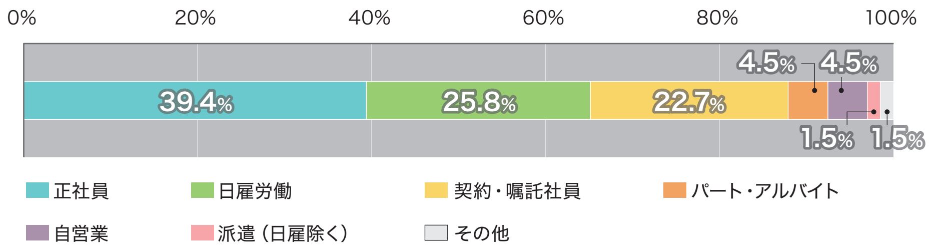


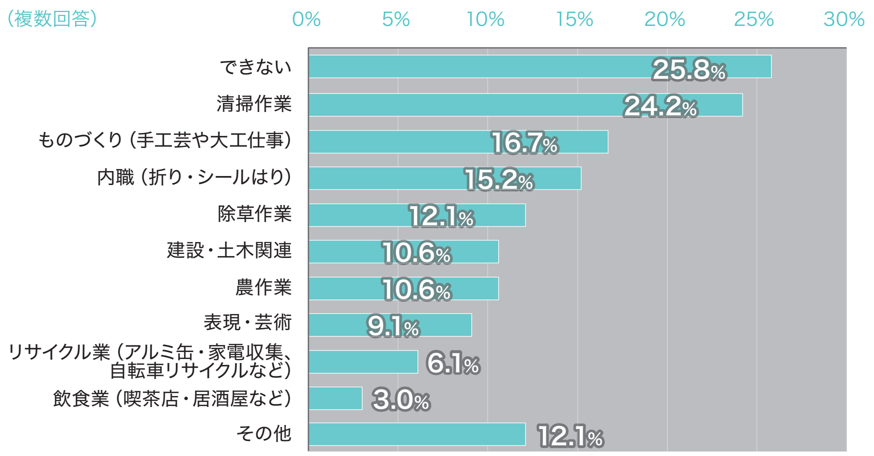
図３−３ 最長職時の雇用形態



③ 仮に仕事ができるのなら、どのような仕事をしたいか、あるいはできるか

次に、仮に仕事ができるのなら、どのような仕事をしたいか、あるいはできるかについてたずねました（図３－４）。もっとも多かったのが、仕事はできない（25.8％）となっています。上位をみると、清掃作業（24.2％）や除草作業（12.1％）のように、地域への貢献度が高く、成果の見えやすい仕事への希望が強いことがうかがえます。また、特掃（あいりん地域高齢日雇労働者特別清掃事業）経験者が多いことも清掃を希望する一因となっているようです。次に、ものづくり（16.7％）のように創造性を伴う作業が上位にあるのも特徴的です。内職（15.2％）のように単純な軽作業への希望が高い一方で、建設・土木関連の仕事（10.6％）のように、これまでの職歴内容と同様の仕事を希望する傾向があることも確認できました。

図３−４ 現在したい仕事、できる仕事



4．人づきあいや「つながり」について

① 日頃の近隣でのつきあい

近所や隣室の人との付き合いがあると回答した人は63.6％、ないと回答した人は36.4％となっています（図４－１）。実際にどのようなつきあい方をしているかたずねたところ、挨拶をかわす程度（43.2％）、立ち話をする程度（27.3％）となっています。７割程度の人が、近所や隣室の人との関係は、挨拶や立ち話をかわす程度の浅い付き合いであることがわかります。一方、困りごとの相談や助け合ったりする（15.9％）、簡単な頼み事や物の貸し借りをする（4.5％）といったように、密接な関係を持ちながら助け合っている人も２割確認できます（図４－２）。

図４−１ 近所の人とのつきあい

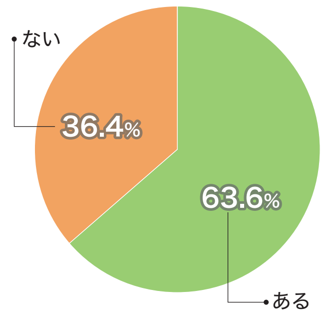
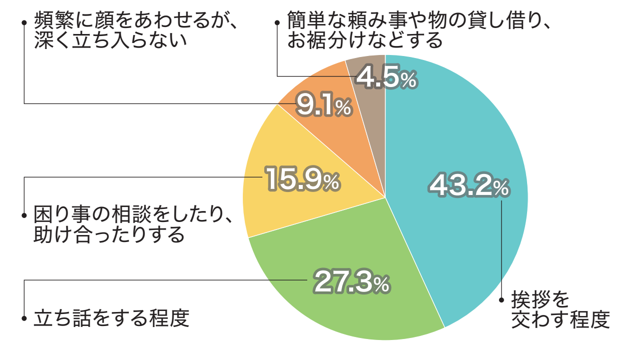


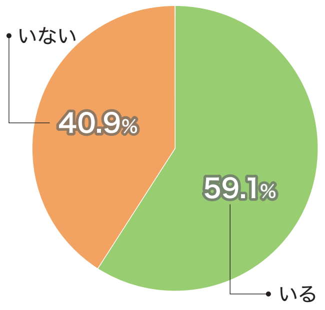
図４−２ つきあい方



② 共通の話題や趣味をもつ友人

共通の話題や趣味を持つ友人の存在についてたずねたところ、59.1％がいると答えています（図４－３）。

図４－３ 共通の話題や趣味をもつ友人



③ 困りごとや不安なことの内容

困りごとや不安なことや、相談できる人の存在についてたずねました（図４－４）。まず、現在困りごとや不安なことについては、62.1％がないと答えています。一方で、あると答えた人は36.4％確認できます。具体的な困りごとの内容には、健康に関することが54.2％と最も多く、次に死に関すること（37.5％）が続きます（図４－５）。

図４－４ 困りごとや不安なこと

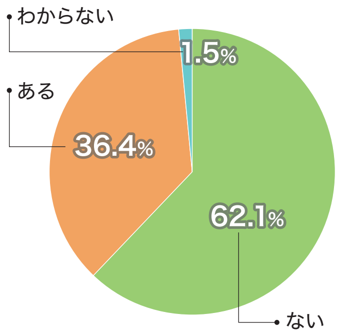
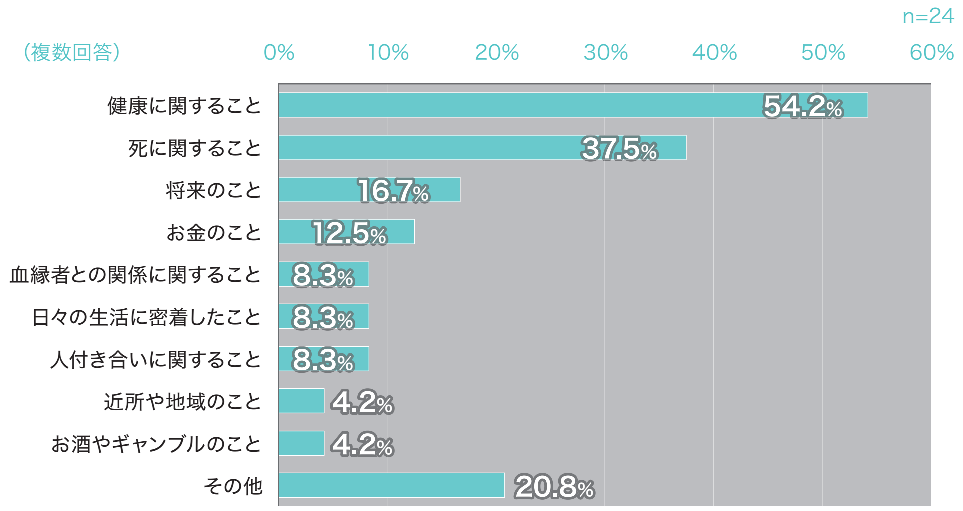


図４－５ 困っている内容



④困りごとの相談相手

困りごとの相談相手は、いると答えた人が65.2％ と比較的高い値を示しており（図４－６）、相談する相手は、友人･知人が31.0％、近所の人が21.4％となっています（図４－７）。これに続いて、福祉事務所のケースワーカー（21.4％）､ひと花センターの職員（19.0％）と公的な相談機能をつうじて相談しているのに対し、血縁関係にある兄弟姉妹（9.5％）、子（4.8％）を相談相手とする割合は低く、親族・血縁関係の希薄さがうかがえます。また、生活支援を実施する居住資源が充実している地域性を反映して、アパートの大家や管理人、不動産屋など住宅に関係する人に相談していると回答した人が11.9％確認できます。

図４－６　困りごとの相談相手

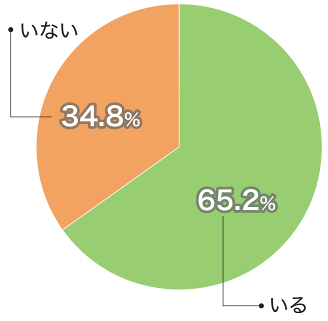
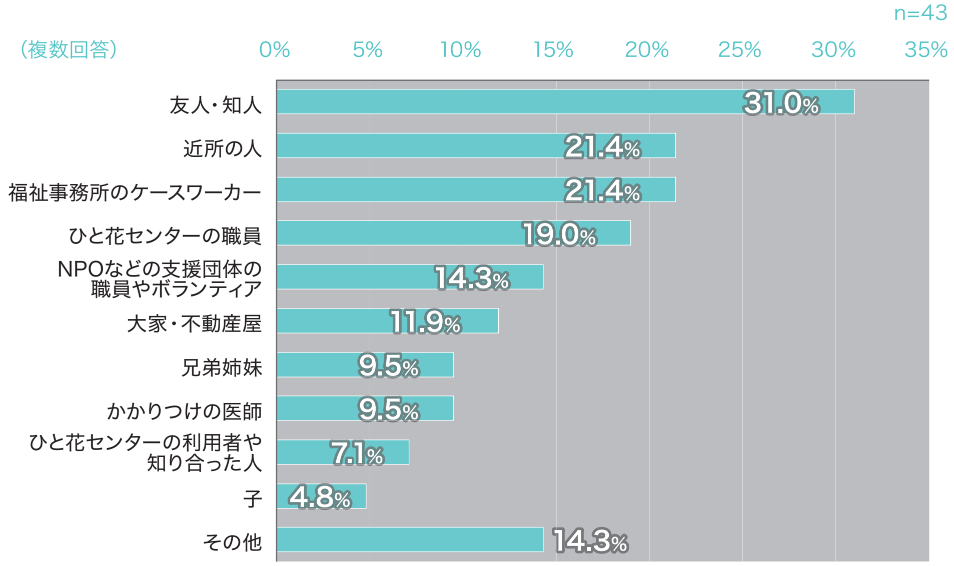


図４－７ 困った時に相談する相手

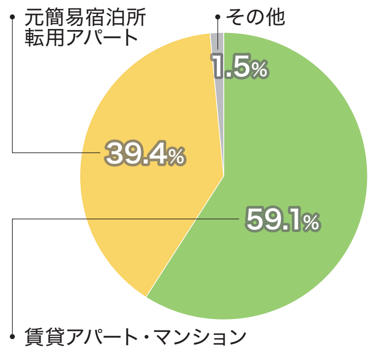


5．住まいについて

① 現在の住まい

登録者の６割近くが、一般の賃貸アパート・マンションに居住しており（59.1％）、４割があいりん地域内や周辺に多い元簡易宿泊所転用アパートに居住しています（39.4％）（図５－１）。

図５−１ 現在の住まい



② 部屋の専用設備

元簡易宿泊所転用アパートには、専用設備が無く、トイレ、風呂、台所全てが共用となっています。一方で、一般の賃貸アパート・マンションでも、専用トイレが無い住宅が10.3％、専用風呂が無い住宅が20.5％、専用台所が無い住宅が7.7％確認できます（表５－１）。

表５−１　住宅形態別の専用設備

		全体	賃貸アパート・マンション	元簡易宿泊所の転用アパート	その他
a. 専用トイレ	なし	45.5%	10.3%	100.0%	0.0%
	あり	54.5%	89.7%	0.0%	100.0%
b. 専用風呂	なし	51.5%	20.5%	100.0%	0.0%
	あり	48.5%	79.5%	0.0%	100.0%
c. 専用台所	なし	43.9%	7.7%	100.0%	0.0%
	あり	56.1%	92.3%	0.0%	100.0%

③ 部屋の広さ

現在の住まいの広さを畳の総数と面積で見てみました。図５－２によると、３畳の部屋に住んでいる人がもっとも多く16.7％、4.5畳が15.2％となっており、4.5畳以下の部屋に住んでいる人が半数を占めます。図５－３は住まいの形態と広さの関係をグラフに表したものです。グラフには示していませんが、全体をみると6㎡以下の部屋に住んでいる人は25.3％、7㎡以上10㎡以下が37.9％となっており、１畳1.65㎡とした場合、10㎡（６畳）以下の住まいに住んでいる人が６割以上となっています。一般の賃貸アパート・マンションの場合、狭いものから比較的ゆとりのあるものまで広さはさまざまです。しかし、簡易宿泊所転用アパートは、6㎡（およそ畳3.5畳）以下が53.8％、7㎡以上10㎡以下が42.3％となっており、９割以上の人たちが非常に狭小な居住空間で生活していることがわかります。一般の賃貸アパート・マンションもあわせて考慮しても、生活保護を受給しているという同条件下において、住宅の形態、広さ、さらに質においても非常にばらつきのある住宅に居住していることがわかります。なお、最低居住面積の水準（単身:25㎡、畳16畳相当）を満たす住宅に住んでいる人は確認できませんでした。

図５−２ 住宅の広さ（畳の総数）

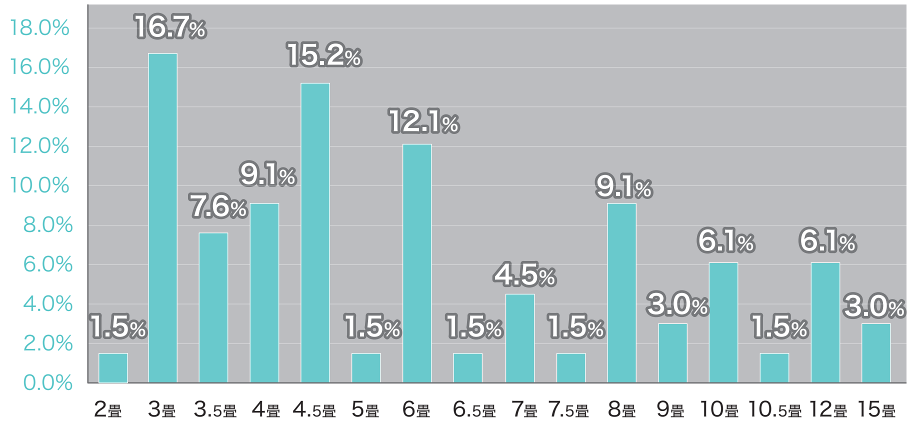
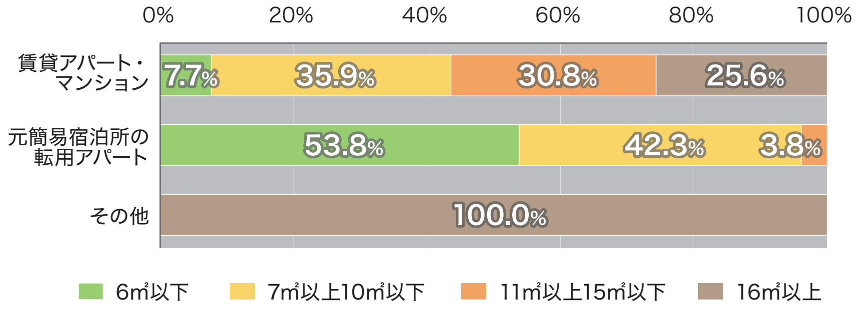


図５−３ 住まいの形態と広さ（㎡）



④ 住んでいる部屋に関係する大家、不動産屋、管理人などとの関わりと関係性

現在の住まいの大家や仲介している不動産業者との関係性についてたずねてみました（表５－２）。大家や不動産屋との関わりについては、ないが57.6％、あるが42.2％となっています。関わりの有無にかかわらず、大家・不動産屋との関係についてたずねたところ、よいが64.3％にたいして、悪いと答えた人は確認できませんでしたが、どちらでもないと答えた人が35.7％となっています。次に管理人とのかかわりは、半数の人があると答えているのに対し、いるが関わりがないという人は18.2％、管理人がいないという物件に住んでいる人は31.8％となっています。支援スタッフとの関係について見てみると、９割以上の人が支援スタッフはいない（92.4％）と答えています。一方、支援スタッフがいても関わりがないが7.6％となっており、調査対象者のほとんどが、生活支援等を実施していないアパートに居住していることがわかります。しかし、これらの調査対象者に個別に話しを聞いてみると、生活支援が実施されていなくても、例えば、大家や不動産屋の助言によって生活保護受給につながったケースや、支援とまではいかないものの管理人や大家と日常的にコミュニケーションを取ったり、安否を気にかけられたりするケースなども散見され、緩やかな見守りの体制が存在しているようです。

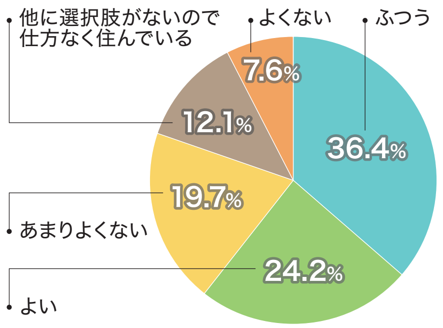
表5－2 住宅に関わる人との関係性

		全体	関係性 よい	関係性 悪い	関係性 どちらでもない
a. 大家・不動産屋	関わりあり	42.2%	64.3%	0.0%	35.7%
	関わりなし	57.6%	0.0%	0.0%	100.0%
b. 管理人	関わりあり	50.0%	69.7%	6.1%	24.2%
	いるが関わりなし	18.2%	9.1%	0.0%	90.9%
	いない	31.8%	0.0%	0.0%	0.0%
c. 支援スタッフ	いるが関わりなし	7.6%	0.0%	0.0%	100.0%
	いない	92.4%	0.0%	0.0%	0.0%

⑤ 住み心地

現在の住まいの住み心地をたずねたところ（図５－４）、36.4％の人がふつうと答えており、24.2％がよいと答えています。一方で、あまりよくない、よくない、と評価をしている人が、合計27％程度となっています。また、他に選択肢がないので仕方なく住んでいるというひとも12.1％確認できます。

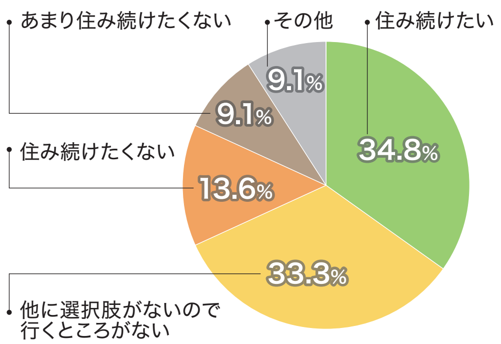
図5－4 住まいの住み心地



⑥ 住宅への住み続け

次に住み続けの意思についてたずねてみたところ（図５－５）、現在の住まいに住み続けたいと答えた人が34.8％となっています。一方で、他に選択肢が無いので行くところないが33.3％、住み続けたくないが13.6％、あまり住み続けたくないが9.1％となっており、住み続けに関しては全体的に消極的な理由が多いことが確認できます。

図5－5 住み続けの意思



6．地域に関すること

ここでは、地域での生活と活動について見ていきます。

① 西成で暮らし始めた時期や目的　西成での生活期間

西成で暮らし始めた時期は20年以上30年未満がもっとも多く、22.7％となっています。次に多いのが、５年以上10年未満で21.2％確認できます（図６－１）

西成に来た目的は、半数以上の54.5％があいりん地域で仕事をするためと答えています（図６－２）。また、アパート等で生活保護を受給するためが18.2％、施設に入所するためが1.5％確認でき、大きく分類すると、仕事のため、福祉のための２つが代表的な理由となっています。その他には、放浪・漂泊の末に釜ヶ崎にたどりついた人（6.1％）や特に目的を持たずにやってきた人たち（3.0％）も確認できます。その他の理由としては、ドヤや良いアパートがあるからといったように、居住資源を求めてやってきた人たち、困ったことがあれば西成に行けばなんとかなると思ってやってきた人なども確認できました。

図6－1 西成での生活期間

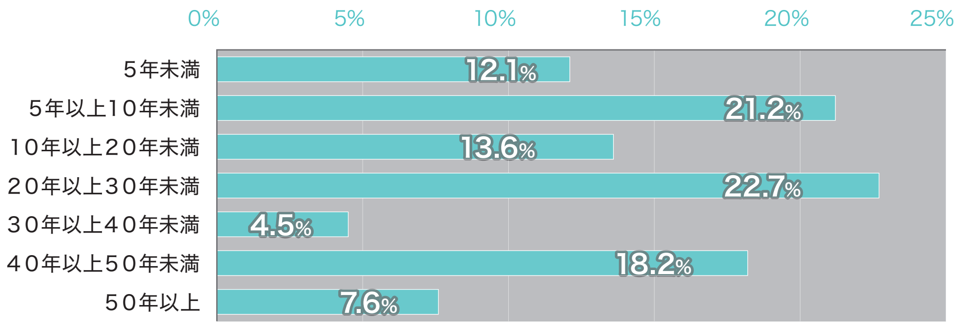
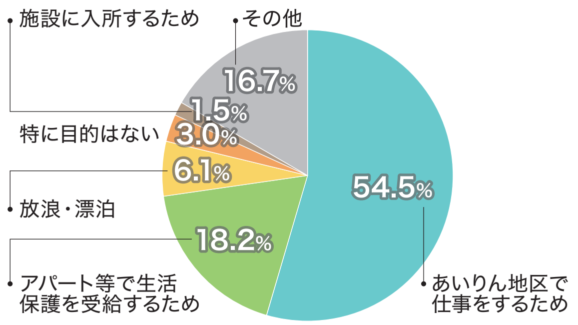
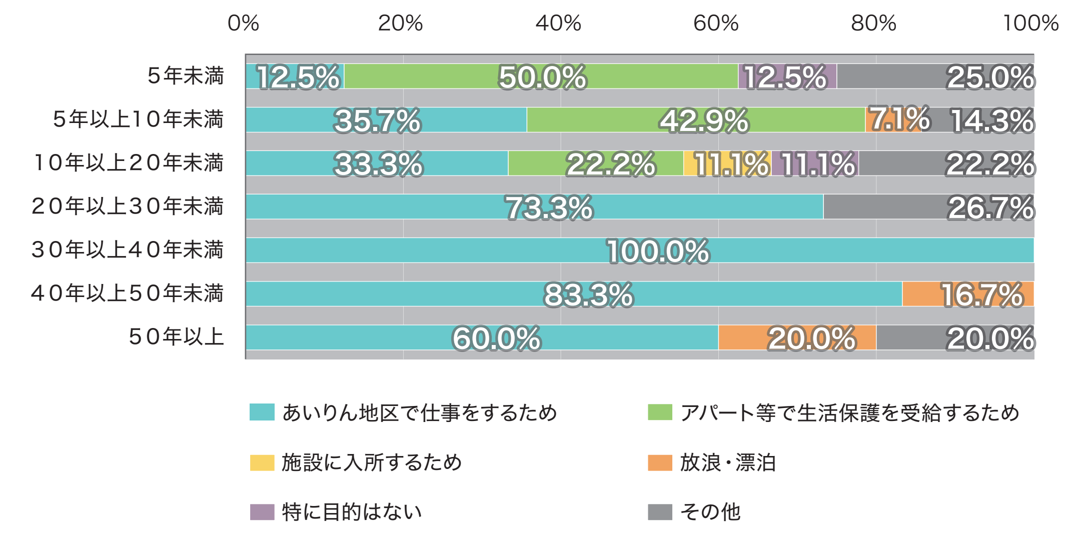


図6－2 西成に来た目的



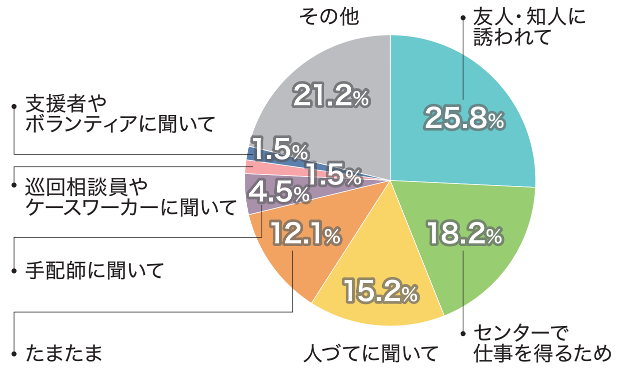
さらに、西成での生活期間別に西成に来た目的をみると、アパートで生活保護を受けるために西成に来た人の割合は、５年未満で50.0％と高い値を示しますが、20年以上生活している人たちには確認できません。また、あいりん地域で仕事をするために西成に来た人は、20年未満は33.3％、一方20年をこえると73.3％となっており、20年を境目として、西成に来た目的が大きく変化していることがわかります（図６－３）。

図6－3 西成での生活期間と西成に来た理由



西成で生活する際のつて（仲介）については（図６－４）、友人・知人に誘われた（25.8%）、センターで仕事を得るため（18.2%）、人づてに聞いて（15.2%）の３つの理由が６割を占めます。

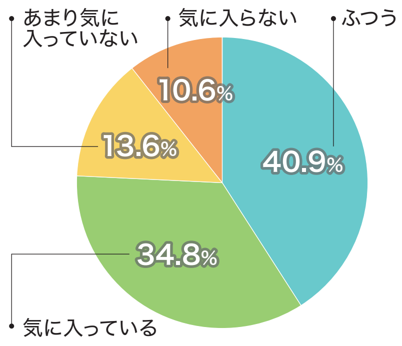
図6－4 どのようなつてがあったか



② 地域への愛着

次に住んでいる地域を気に入っているかどうかについてたずねてみました（図６－５）。40.9 %がふつうと答えており、気に入っているは34.8%です。一方で、４分の１の25%程度があまり気に入っていない、気に入らないと答えています。

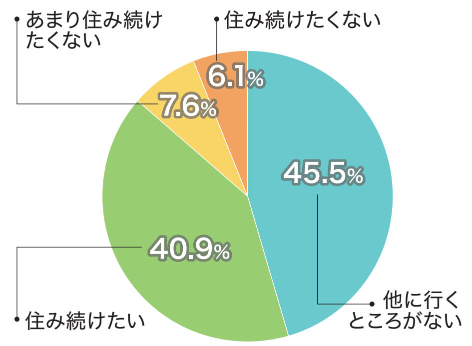
図6－5 地域を気に入っているか



③ 地域への住み続け

地域への住み続けの意思についてたずねました（図６－６）。半数近くの45.5%が、他に行くところがないので住み続けるしかない、と答えています。住み続けたいという意思を示した人も40.9%確認できますが、あまり住み続けたくない、住み続けたくないと答えた人たちも14%程度確認できます。

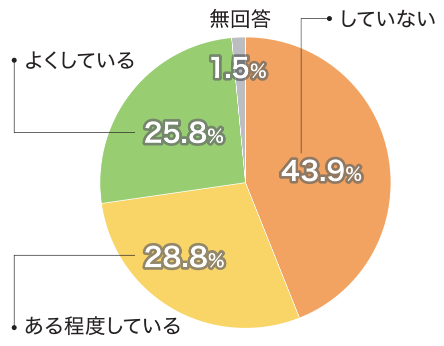
図6－6 地域への住み続けの意思



④ 地域の行事や活動への参加状況

次に地域との関わりについて見ていきます。まず、地域の行事や活動への参加は、43.9%がしていないと答えています。これに対して、ある程度しているが28.8%、よくしているが25.8%となっており、半数以上の人が地域での活動に何らかの形で関わっていることがわかります（図６－７）。

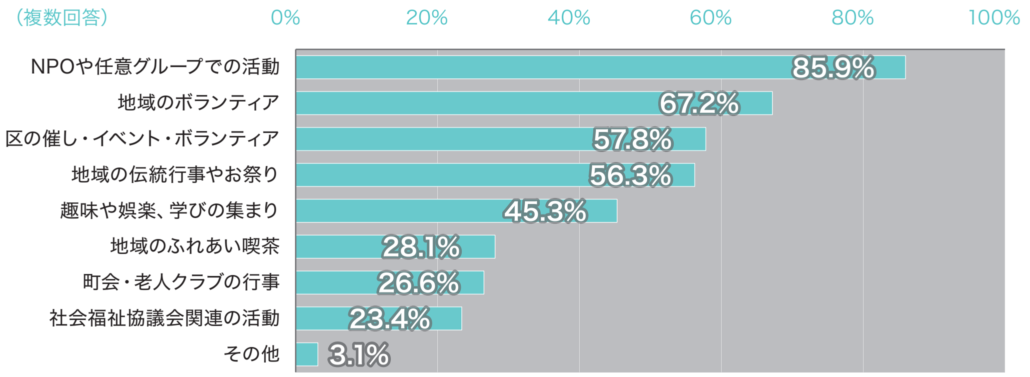
図6－7 地域の行事や活動への参加



a. 地域活動・行事への認知

次に、地域でのどのような活動に参加しているか、参加の頻度と参加のきっかけについてたずねました。まず、それぞれの地域活動の認知度をみてみると、NPOや任意グループでの活動がもっとも多く、85.9%となっています（図６－８）。地域のボランティア、区の催し・イベントボランティア、地域の伝統行事やお祭りに関しては、半数以上の人が活動の存在を知っていますが、地域のふれあい喫茶、町会・老人クラブの行事、社会福祉協議会関連の活動などの町会や社会福祉協議会などの公的部門が実施している活動については、認知度が低いことがわかります。

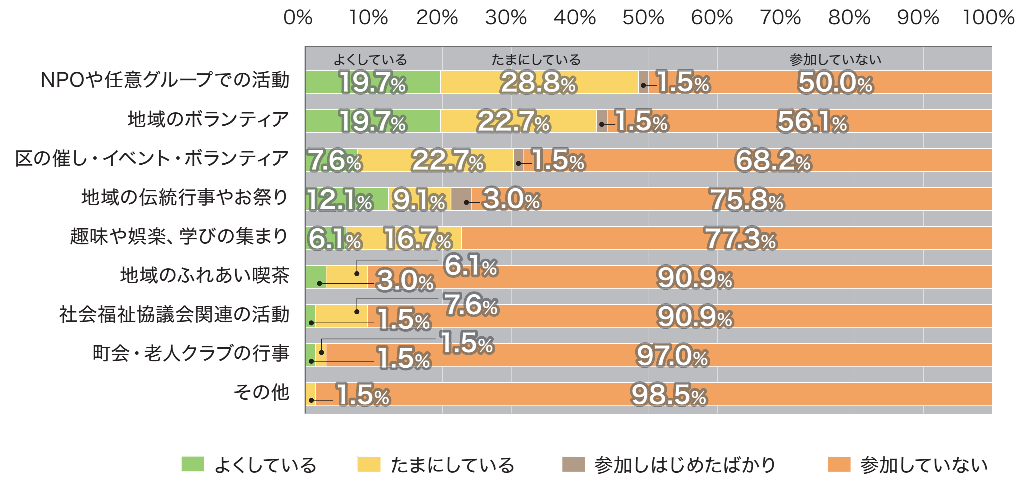
図6－8 地域の活動への認知



b. 参加の頻度

次に、地域活動の参加頻度についてみていきます（図6－9）。まず、NPOや任意グループでの活動に参加している人が50％確認できます。参加の多い上位５位は地域活動の認知の上位５位と同じ結果となっています。実際の参加についても同様に、町会や公的部門が主催する活動への参加が低くなっています。内閣府が2014年（H26年）に実施した「一人暮らし高齢者に関する意識調査」（2015年7月3日参照：http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/zentai/index.html）では、一人暮らし高齢者の地域のグループ活動の参加経験として、趣味やスポーツの集まりが28.6％もっとも高く、これに続いて28.2％の人が自治会や町内会での活動となっています。一方で、NPOやボランティアグループでなどの社会活動は5.6％と低い値となっており、本調査の傾向とはまったく異なった結果であることがわかります。ひと花センターの登録者のNPOでの活動やボランティア活動への参加頻度の高さは、登録者の居住する西成区内での地域活動が活発であること、あいりん地域（釜ヶ崎）における活動資源が豊富であること、さらに、そうした活動の機会にひと花センターのように登録者と地域を仲介する役割があることが、大きな要因となっていると考えられます。

図6－9 地域活動への参加頻度



c. 活動を知った、また参加するようになったきっかけ

活動を知った・参加したきっかけについては（図6－10）、ひと花センターでのプログラムとして地域の活動を知った人が33.5％となっています。その他は、ポスター・チラシをみて（21.8％）、ひと花センターで情報を得て（12.7％）、知人友人が参加していたから（8.7％）、NPOなどの支援団体をとおして（8.4％）となっています。これを参加活動別にみたところ（図6－11）、町会関連や社協関連の活動は、ポスター・チラシなどで情報を得ている傾向が強く出ています。区のイベントやボランティア、地域のボランティア、NPOなどの活動は、ひと花センターのプログラムの一環として、あるいはひと花センターで情報を得て参加する傾向が際立って強く出ています。これは裏を返せば、ひと花センターと町会・老人会や社会福祉協議会とのつながりが希薄であるようにとらえることもできますが、もともとあいりん地域での町会加入率は７％と非常に低く、町会活動そのものがあまり活発ではないため、つながりが生まれにくい可能性があります。しかし、プロジェクトの連合体事業の中には町会に関係するNPOもあるため、町会とも関係を持ちつつあるのが現状です。今後のひと花での活動や事業に関する協力連携体制の構築を町会に働きかけることで、つながりの強化や地域の活性化につながる取組みが期待できるかもしれません。

図6－10 活動を知った・参加したきっかけ

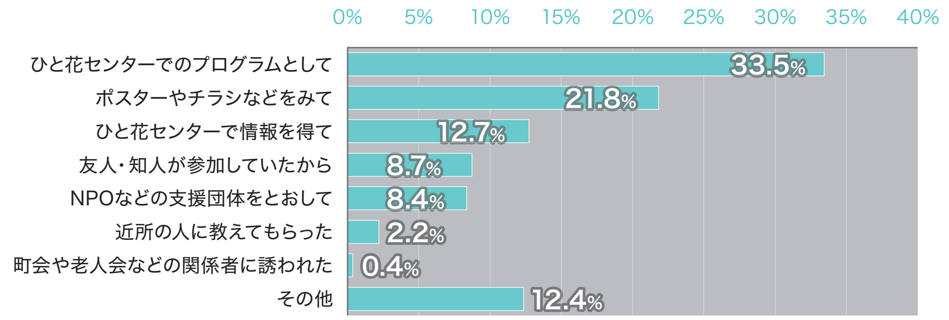
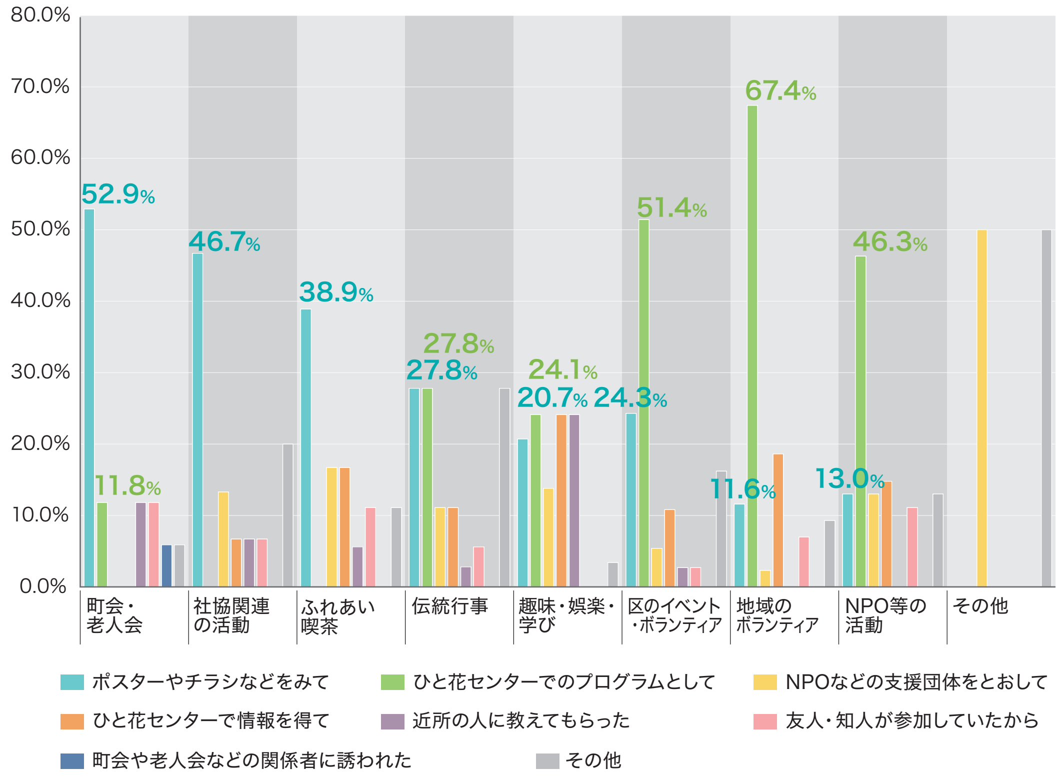


図6－11 参加活動別の活動の認知および参加のきっかけ



⑤ 地域のために何か役に立ちたいと思うか、自分は地域の役に立っているか

地域のために役に立ちたいと思っている人が69.7％と意欲の高さがうかがえますが（図６－１２）、実際に地域の役に立っているかどうかについては、実際に役に立っていると答えた人は19.7％にとどまります（図６－１３）。

図6－12 地域のために役に立ちたい

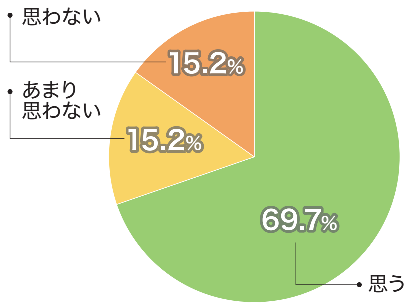
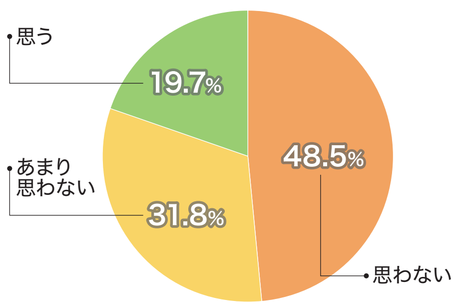


図6－13 地域の役に立っている

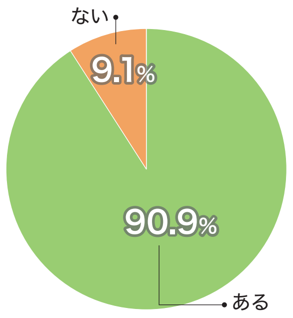


7．普段の楽しみや活動

① 日頃楽しみにしている活動

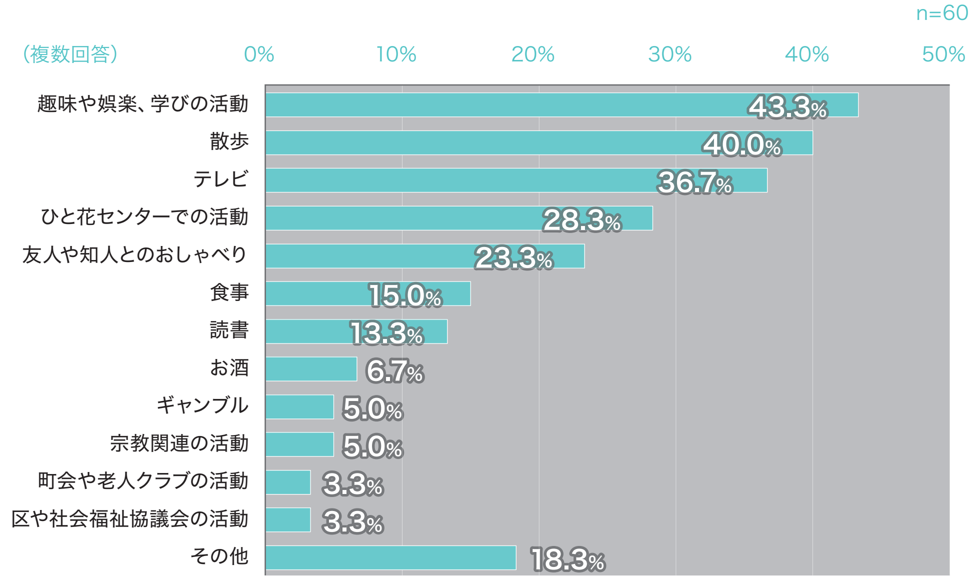
次は日頃の楽しみについてたずねます。普段楽しみにしている活動について、あると答えた人は90.9％、ないと答えた人は9.1％です（図７－１）。

図7－1 楽しみにしている活動



具体的にどのような楽しみがあるかたずねたところ、上位に趣味や娯楽、学びの活動（43.3％）、散歩（40.0％）、テレビ（36.7％）が確認できます。これに、ひと花センターの活動（28.3％）、友人や知人とのおしゃべり（23.3％）が続きます（図７－２）。一人での楽しみが多く単調とも取れる生活の中で、趣味や娯楽、学びの活動やひと花センターでの活動は、人と一緒に楽しむことのできる貴重な場になっていることがわかります。また、相対的にお酒やギャンブルの割合が低くなっていることも注目すべき点です。ギャンブルやお酒以外の楽しみの選択肢があることが明確に現れています。

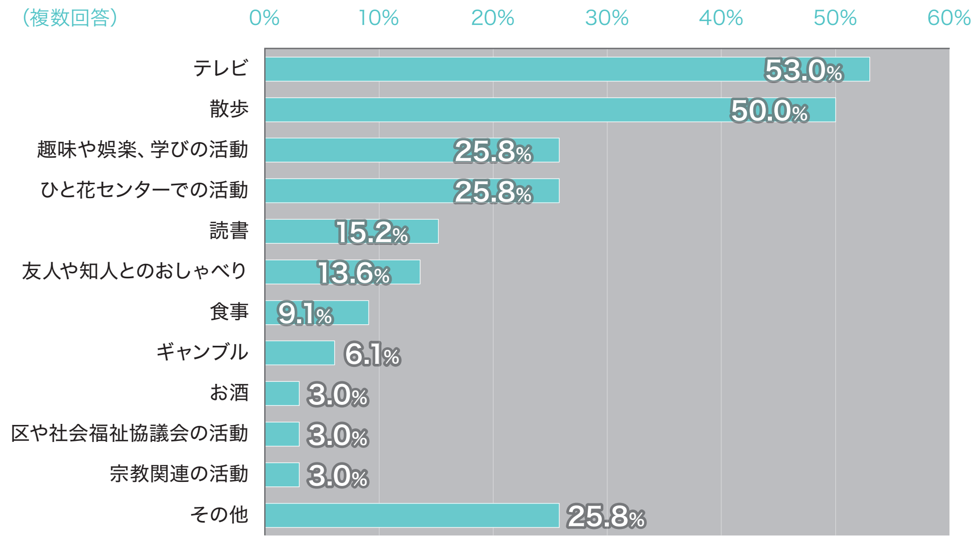
図7－2 日頃の楽しみ



② 暇な時間の過ごし方

日頃の楽しみと同様の選択肢で、暇な時の過ごし方についてたずねてみました（図７－３）。こちらも、テレビや散歩を挙げる人が半数以上確認できます。この次に、趣味、娯楽、学びの活動、ひと花センターでの活動が25％以上となっています。一方で、お酒やギャンブルなどに時間を潰す人は、ギャンブルが6.1％、お酒が3.0％となっており、割合としては少なくなっています。

図7－3 暇な時間の過ごし方



③ お酒

次に飲酒についてみていきます。

まず、飲酒の習慣については、大まかに見ると、飲む人と飲まない人がちょうど同数程度の割合で確認できます（図７－４）。お酒をどのような時に飲むかたずねてみたところ（図７－５）、単に好きだからと答えた人が27.3％、飲酒が習慣化しているからが24.2％、人付き合いのためが24.2％となっています。嗜好やコ

ミュニケーションの手段としての飲酒が多いですが、これとは反対に、さみしい時（18.2%）、よく眠れるから（18.2%）、ストレスがたまっている時（15.2%）などの、消極的な理由で飲酒する人たちも一定数確認できます。

図7－4 お酒

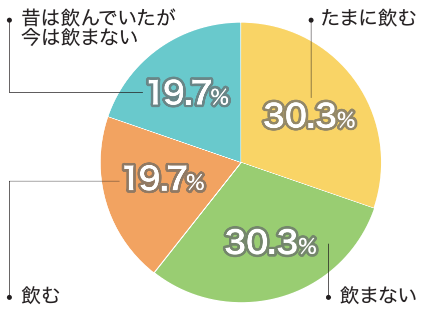
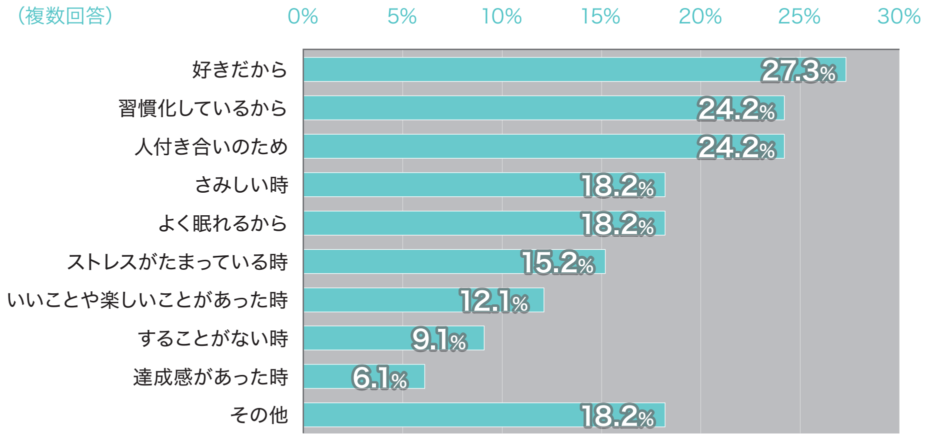


図7－5 お酒を飲むとき



④ ギャンブル

次にギャンブルについてみていきます。ギャンブルは大きく分けて、する人が４割弱、しない人が６割強となっています（図７－６）。どのような時にギャンブルをするかたずねたところ（図７－７）、好きだから（32.0%）、趣味だから（28.0%）のように、ギャンブルそのものの行為が娯楽や趣味となっている人たちが多く確認できます。しかし、単なる趣味・娯楽の範疇を超えて、お金を増やすための手段としてギャンブルをする人も24.0%確認できます。また、することが無い時（12.0%）、ストレスがある時（12.0%）のように、お酒と同様消極的な理由からギャンブルをする人も確認できます。

図7－6 ギャンブル

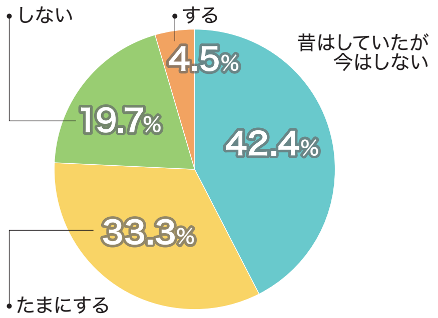
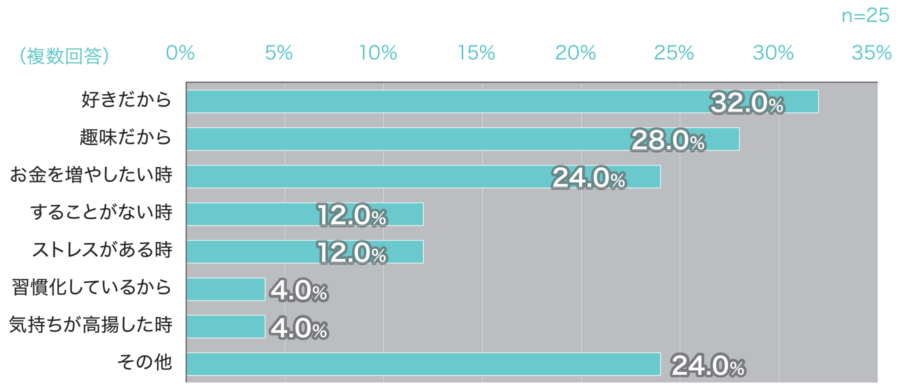


図7−7 ギャンブルをするとき



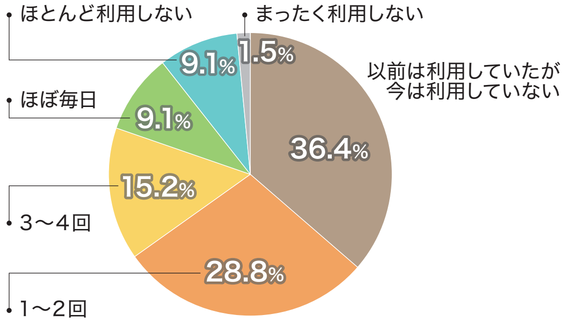
8．ひと花センターの利用実態

① ひと花センターの利用回数（週あたり）

今回の調査では、定期的に利用している人（常用）、以前は利用していたが最近では利用していない人たち（常用外）を対象に実施しています。

まず、ひと花センターの週あたりの利用回数は、１～２回が28.8%となっており、定期的に利用する中ではもっとも多くなっています。一方、以前は利用していたが、今は利用していない人（常用外）は36.4%確認できます（図８－１）

図8－1 週あたりの利用回数



来所方法はほとんどの人が徒歩です（図８－２）。来所までの所用時間は、10分以内が最も多く（図８－３）、78.6%となっており、８割近くがひと花センターの徒歩圏内に住んでいます。

図8－2 来所方法 n=42

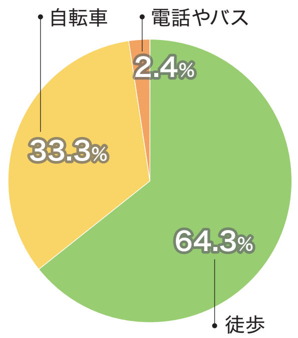
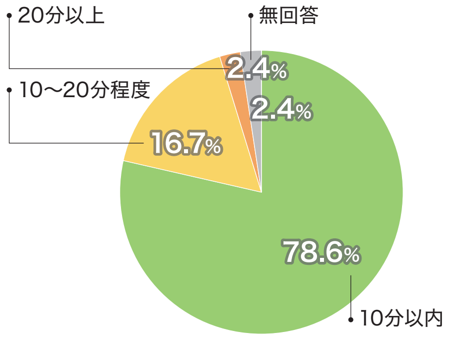


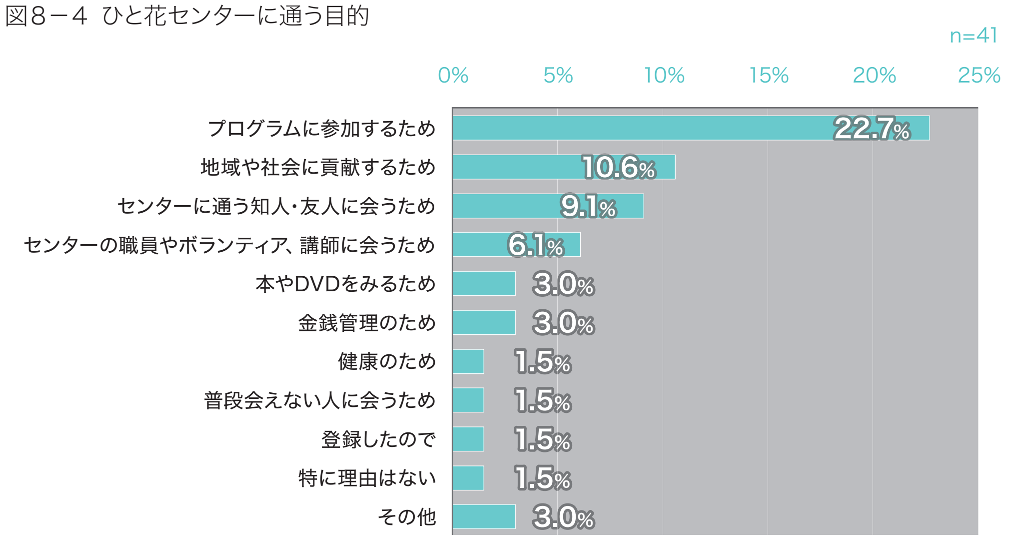
図8－3 来所にかかる時間 n=41



② ひと花センターに通ういちばんの目的

ひと花センターに通ういちばんの目的をたずねてみました（図８－４）。上位は、プログラムに参加するためが22.7％、地域や社会に貢献するためが10.6％となっており、提供されているプログラムに参加するだけではなく、ひと花での活動を通した地域貢献を目的にしている人が多いことがわかります。これに続くのが、ひと花センター通う知人・友人に会うため（9.1％）、センターに関わる職員やボランティア・プログラム講師に会うため（6.1％）となっており、人に会うことを目的にしている人はあわせて15％程度確認できます。

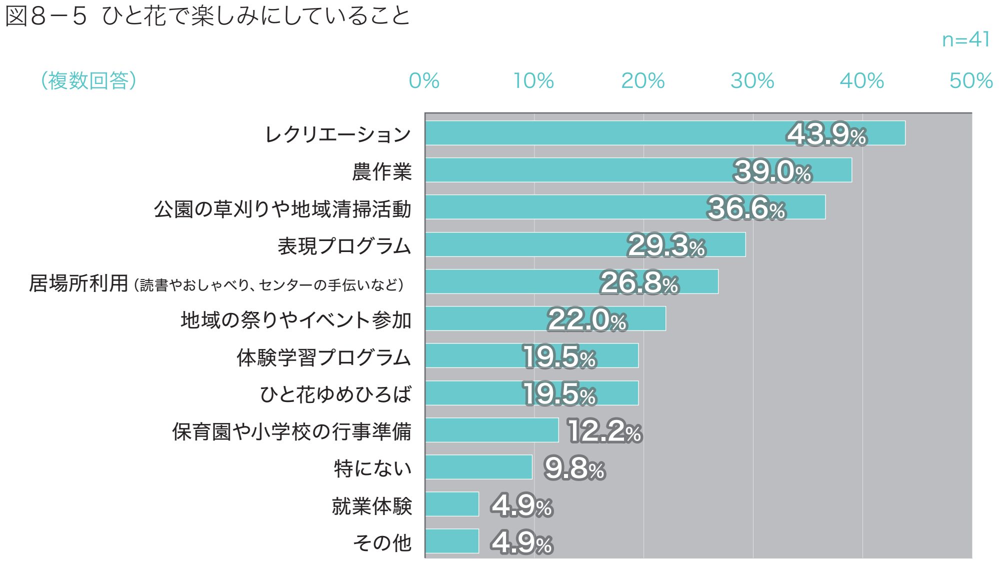
図８－４ ひと花センターに通う目的



③ ひと花センターで楽しみにしていること

ひと花センターで楽しみにしていることは、レクリエーションが43.9％なっています。レクリエーションは、気軽に参加できるうえに、室内での活動が好きな人でもアウトドアでの活動が好きな人も参加しやすい内容のものが多いので人気があるようです。これに続いて、農作業（39.0％）、公園の草刈りや地域清掃活動（36.6％）などの体を動かす活動に人気があるようです（図８－５）。

図８－５ ひと花で楽しみにしていること

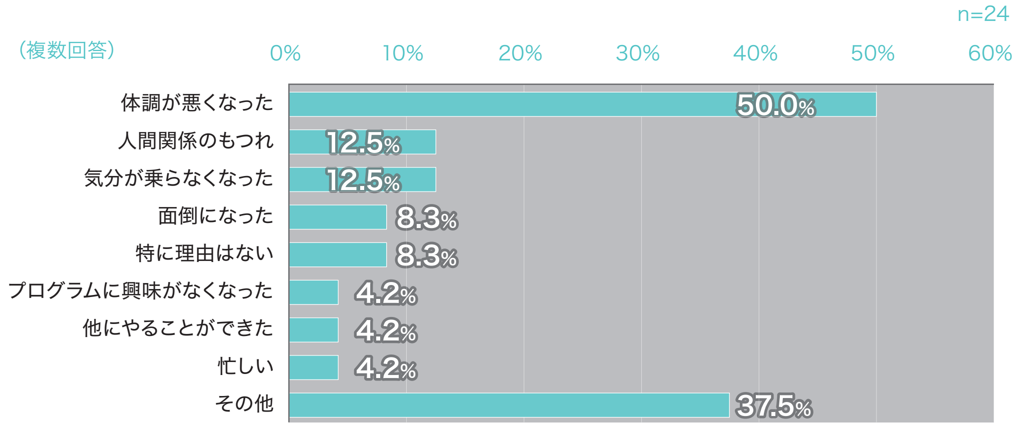


④ ひと花に行かなくなった理由

ひと花センターが開設から2年弱を経て、当初は利用していたものの、現在では顔を見せなくなった人たちもいます。今回の調査では、そうした人たちにも調査に協力してもらい、ひと花に来なくなった理由やひと花にのぞむことなどについてたずねてみました。

以前は利用していたけれども何らかの理由やきっかけにより、ひと花を利用しなくなった人たち（常用外）にその理由についてたずねました（図８－６）。来なくなった半数の人が体調の悪化（50.0％）を理由としています。その他、人間関係のもつれ、気分が乗らなくなった、面倒になった、などの理由が挙げられます。その他の理由としては、人間関係を作ったり、人と関わったりすることを苦手に感じている人や、コミュニケーションの些細な行き違いなどを理由に挙げている人もいます。

図８－６ ひと花に行かなくなった理由



⑤ ひと花にのぞむこと

次に、ひと花にのぞむことについて、全ての調査対象者にたずねたところ、あると答えた人が56.1％確認できました（図８－７）。具体的にどのようなことをのぞんでいるかたずねたところ（図８－８）、長く続けてほしい（67.6％）が突出して高くなっています。その他には、プログラムに関する要望、利用条件や相談・サポートに関すること、設備運営や職員に関することなどへの希望がそれぞれ確認できます。しかし、こうしたひと花センターの具体的な内容よりも、ひと花センターそのものの長期的な存続をのぞむ傾向が強く出ていることがわかります。

図８－７ ひと花にのぞむこと

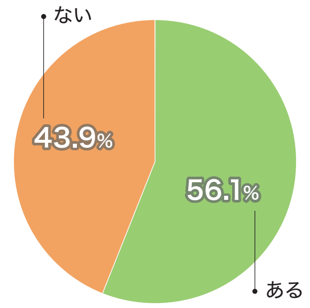
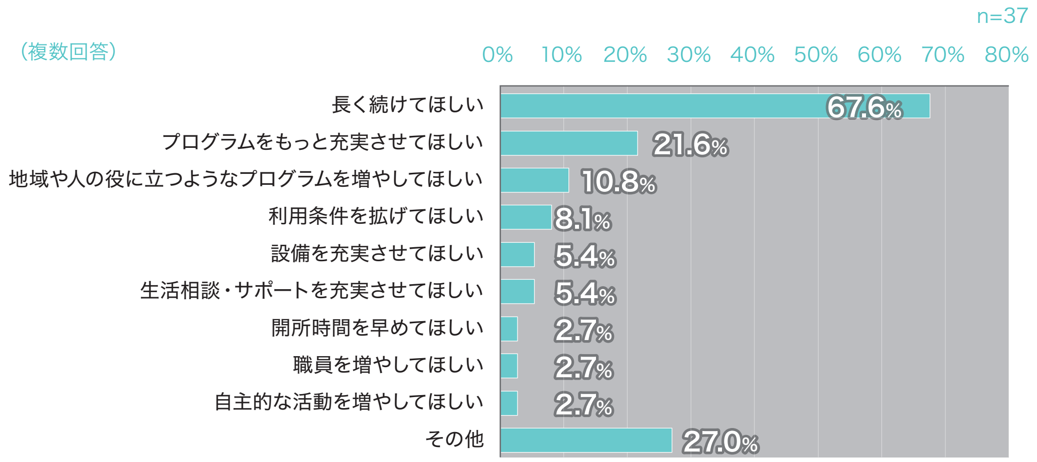


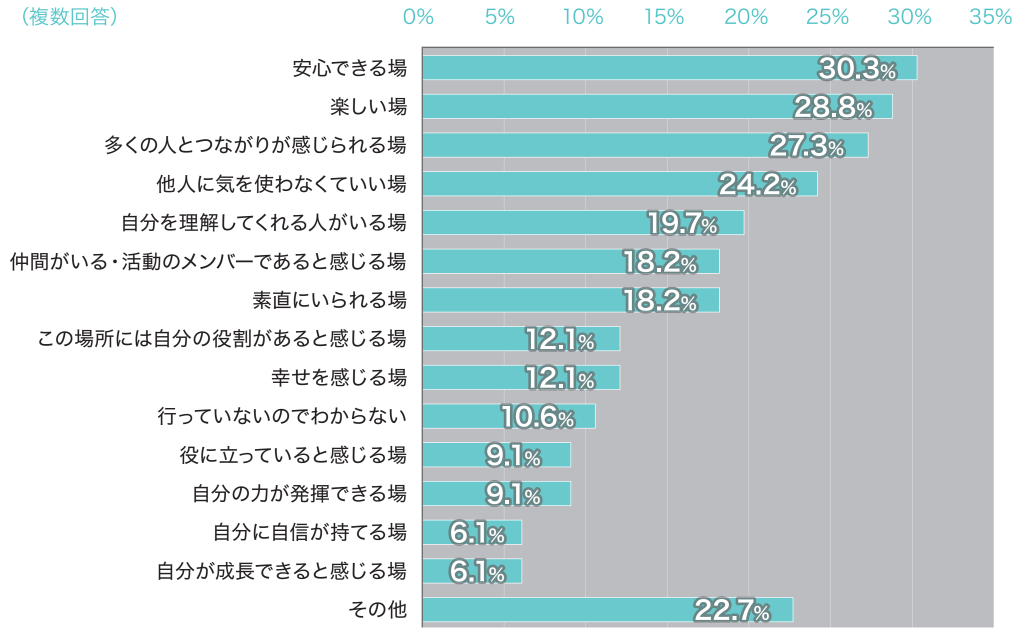
図8－8 ひと花にのぞむこと（具体例）



⑥ 居場所としてのひと花センター

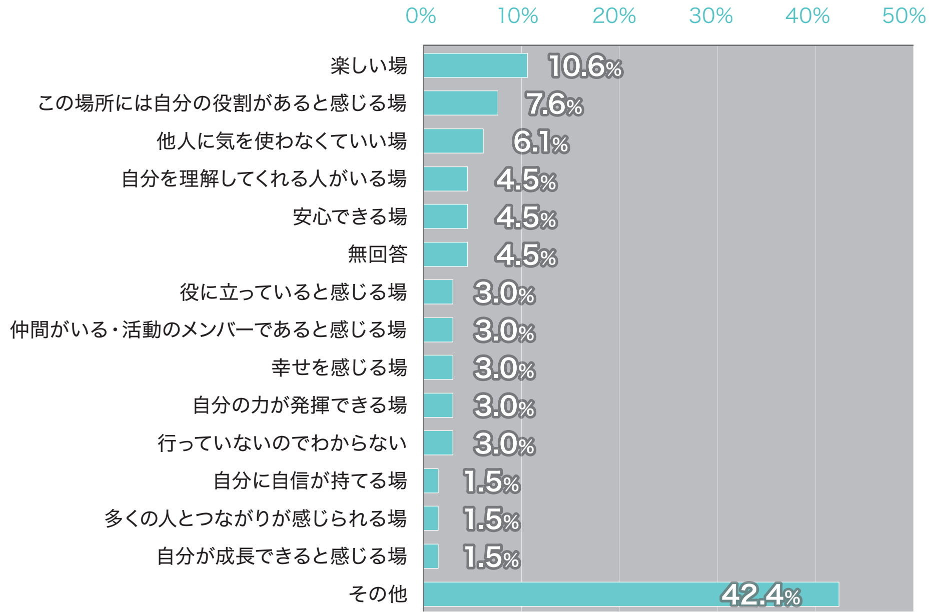
次に、ひと花センターがどのような居場所になっているかたずねてみました（図8－9）。安心できる場所、楽しい場所と感じている人が多く確認できます。また、多くの人とのつながりを感じられる、他人に気を使わなくていい、自分を理解してくれる人がいる、仲間がいる・活動のメンバーであると感じる、などの他者との関わりやつながりを意識できるような居場所であるという割合が高くなっています。一方で、自分が役に立っている、力が発揮できる、成長できる、自信が持てるといった自己評価につながるような居場所となっていないことがわかります。

図8－9 ひと花はどのような居場所か



次に、ひと花センターが今後どのような居場所になればいいかたずねてみました。上位を見ると、楽しい場と回答した人が10.6%、この場所には自分の役割があると感じることができる場が7.6%、他人に気を使わなくていい場が6.1%となっていますが（図8－10）、いずれの項目も割合的に低く、選択肢として挙げた項目からは何らかの傾向は読み取ることができませんでした。一方で、その他と回答した人は42.4%にのぼります。いくつか例を挙げてみると、お互いに気づかい合えるような場所、みんなが平等に発言できる場所、もっと音楽のある場所、悪口や中傷のない場所、人とのトラブルが無い場所、深い話ができる場所、といったように、さまざまな思いが確認されました。これは、調査対象者の人たちがもつ居場所としてのひと花への期待や希望が多様であることを物語っています。

図8－10 どのような居場所になればいいか



⑦ ひと花センター以外に定期的に通う場所

ひと花センター以外に定期的に通う場所の有無についてたずねたところ、66.7%の人があると答えています（図8－11）。具体的にどのようなところに通っているかたずねてみると（図8－12）、図書館がもっとも多く27.3％となっており、次に行きつけのお店（25.0%）が続きます。この他には、ココルーム（20.5%）やむすび（15.9%）などの地域で活動するグループの拠点や、ふるさとの家（13.6%）、西成市民館（13.6%）、NPOの事務所（11.4%）などの相談・支援機能をもつ団体が開放しているスペースなどに通っていることがわかります。また、地域のふれあい喫茶（13.6%）や老人福祉センター（9.1%）などの町会関連の取組みや社会福祉協議会関連の施設に定期的に通っている人も確認できます。

図8－11 ひと花以外に通う場所

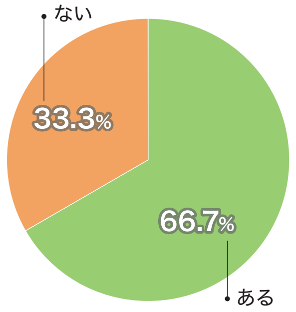
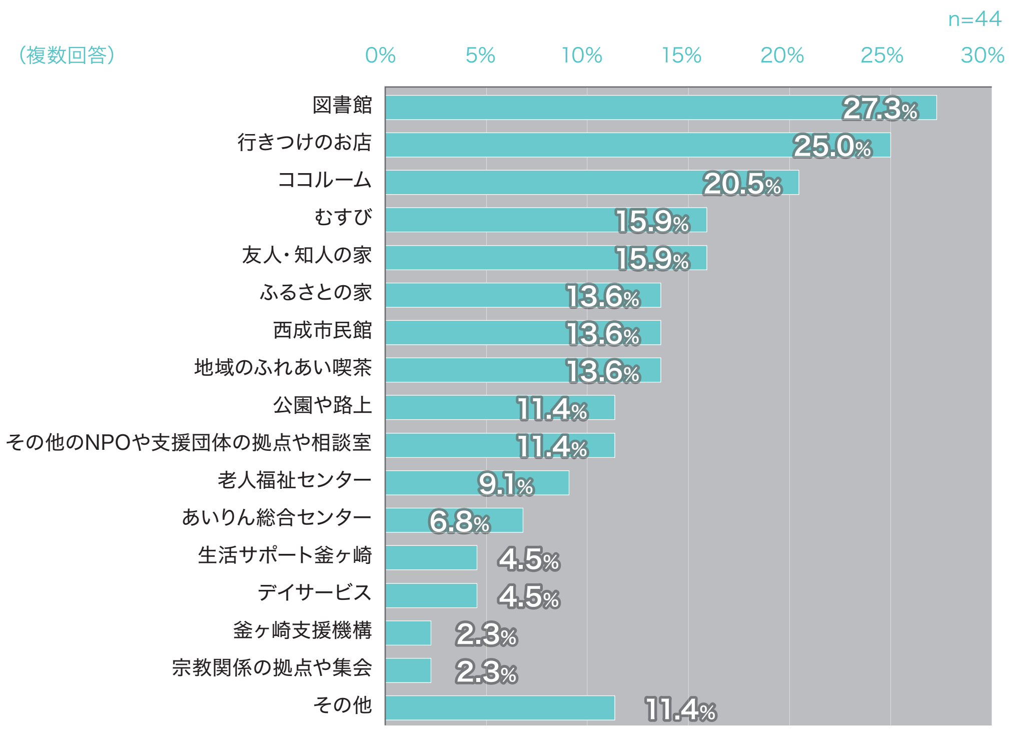


図8−12 ひと花以外にかよう場所（具体例）

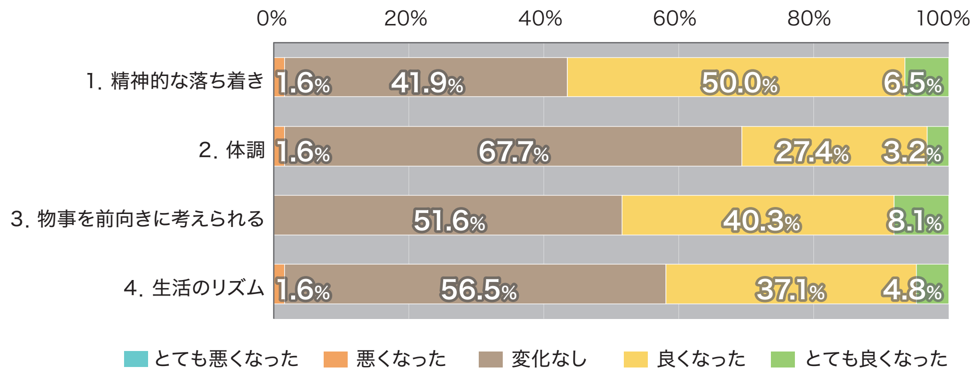


9．ひと花センター利用後の変化

ここでは、ひと花センターに通うようになって調査対象者の生活にどのような変化があったのか、調査対象者の主観的な意識にもとづく変化について明らかにしていきます。

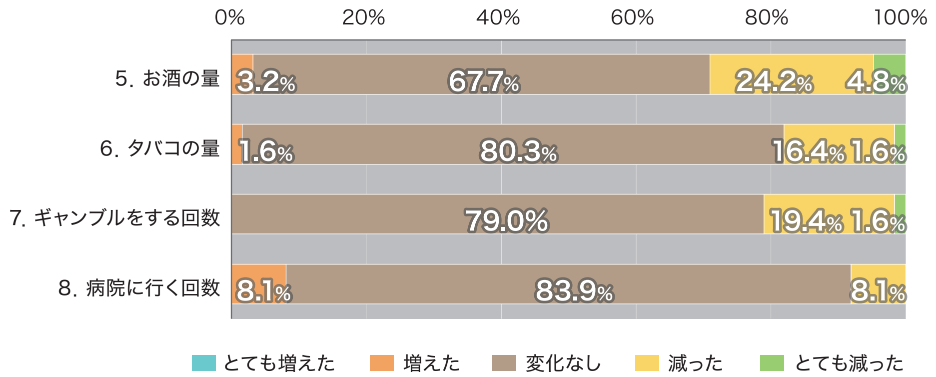
まず、心身の状態や生活のリズムに関しては、全体的に３割から４割の人が、よい方向に変化していると答えています。精神的な落ち着きについては、よくなったと答えた人が50.0%、とてもよくなったが6.5%となっており、半数以上の人がひと花に通いだして精神的な落ち着きを感じています（図９−１）。

図９−１ 心身の状態や生活のリズム



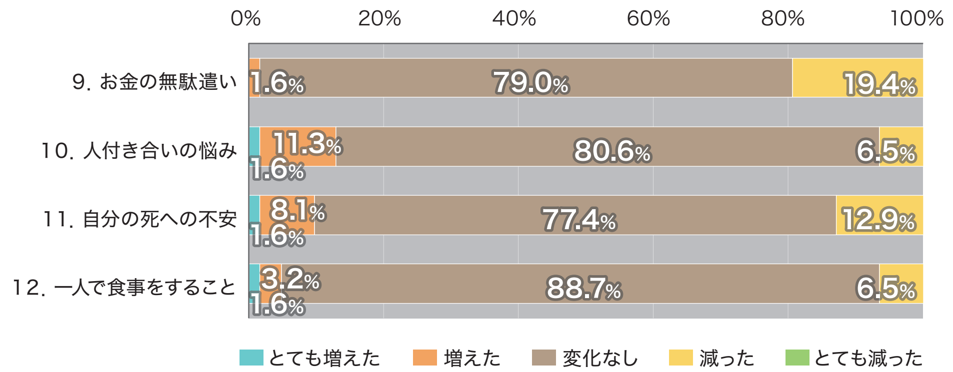
次に、お酒、タバコ、ギャンブルに関しては、大部分が変化なし、と答えていますが、２割から３割程度の人たちがよい変化を感じているようです（図９−２）。お酒の量が減ったという変化を実感している人が、他の項目よりも若干多くなっています。病院に行く回数は、増えた人が8.1%確認できますが、孤立していた状況から、ひと花センターに通うようになったことで、センターでできた仲間や職員、健康教室に関わる看護師などに体調について相談できる機会が増え、それら相談相手から医療機関への受診をすすめられたことが一つの要因と考えられます。また加齢に伴う持病の悪化や、体調不良なども影響していると考えられます。

図９−２ お酒、タバコ、ギャンブル、通院



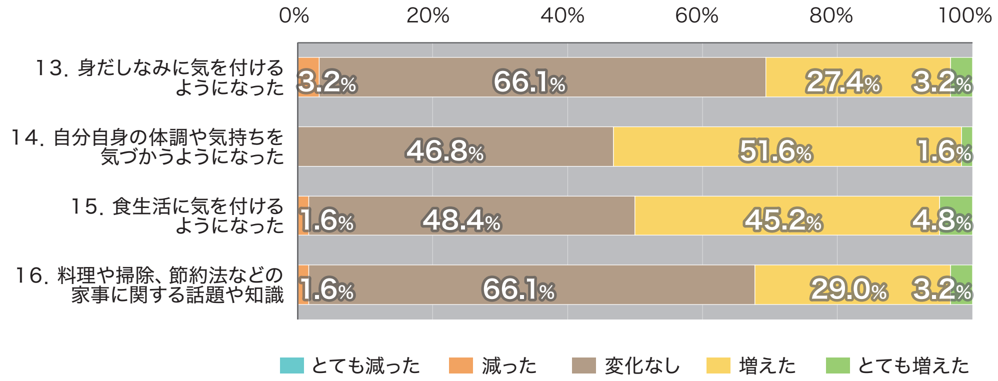
お金のことと、悩み、不安、孤食に関しては、全体的に８割程度の人が変化なしと答えていますが、ひと花に通い始めたことでお金の無駄遣いが減ったと答えている人が２割程度確認できます（図９−３）。一方で、人付き合いの悩みが増えた、とても増えたと感じている人が13%程度確認でき、自分の死への不安を感じている人も10%程度確認できます。病院にいく回数が増えたと答えた人も8.1%確認できます。ひと花センターを利用して新たな知人・友人ができたことで生じる悩みや、生活が落ち着き、先のことを考える余裕ができたことで生じる将来への不安など、生活の変化によって新たな不安や悩みが出てきているようです。

図９−３ お金、悩み、不安、孤食



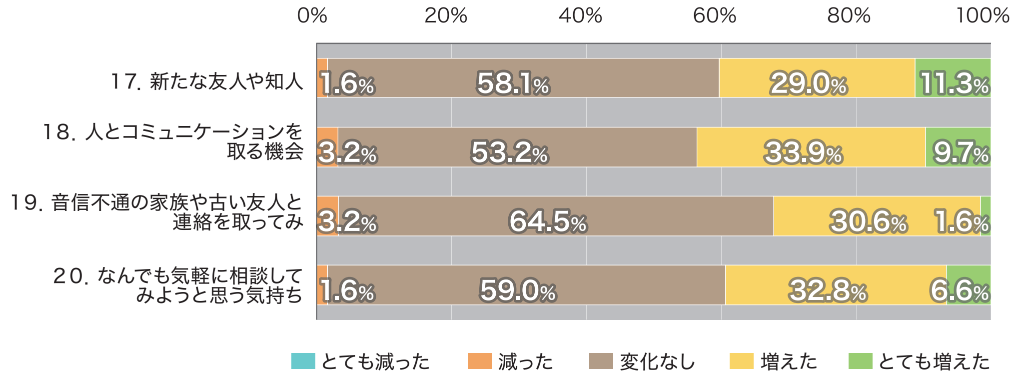
自らの心身や暮らしへの気づかいに関しては、自分自身の体調や気持ちへの気づかいや、食生活に気をつけるなど、半数近くが自分自身への気づかいが増えたと答えています（図９－４）。身だしなみや家事に関する話題や知識に関しても３割程度の人が増えた、とても増えたと答えており、自分自身の心身や衣食住をめぐる生活全般への関心が増加していることがうかがえます。

図９－４ 自らの心身や暮らしへの気づかい



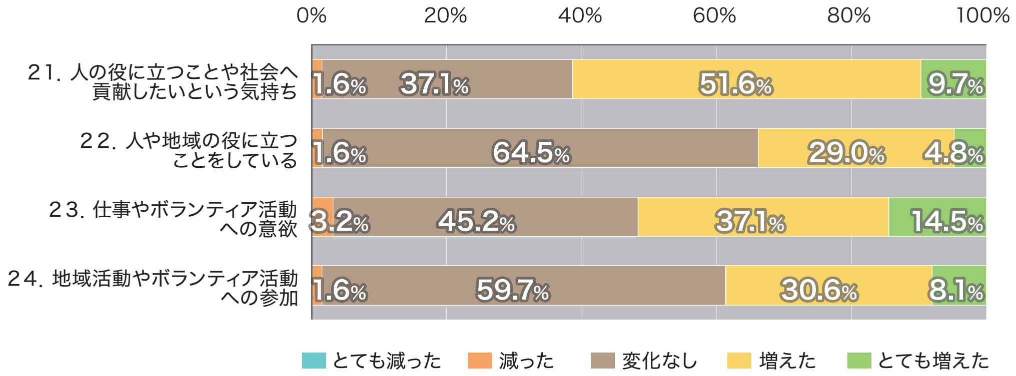
次に他者とのコミュニケーションを見ていきます。全体的に４割の人が他者とのコミュニケーションに関して増えている、とても増えていると感じています（図９－５）。新たな知人や人とのコミュニケーションに関しては、ひと花に通いだして以降、とても増えたと答えている人が10％程度確認できます。ひと花が新たな出会いやコミュニケーションを提供する場となっていることがわかります。

図９－５ 他者とのコミュニケーション



社会や地域とのつながりについて見てみると、ひと花を利用するようになって、人の役に立つことや社会へ貢献したい気持ちに関して、51.6％が増えた、9.7％がとても増えたと答えています（図９－６）。また、実際に人や地域の役に立つことをしているという実感を持っている人も、30％以上確認できます。仕事やボランティア活動への意欲は、とても増えたが14.5％、増えたが37.1％となっており、ひと花利用後の意欲の高まりがうかがえます。実際の地域活動やボランティアへの参加も、30.6％が増えた、8.1％がとても増えたと答えており、意欲が実際の参加にむすびつきつつあることがわかります。

図９－６ 社会や地域とのつながり



１０．総括

ひと花センター登録者実態調査では、以上のように登録者の生活実態と利用状況、さらに利用後における登録者の生活や地域活動についての変化を明らかにしました。調査の結果から、登録者の属性および利用状況と利用後の変化について簡単にまとめます。

ひと花センターの登録者の健康状態は、普通が４割、良いが３割、あまり良くない、良くないが残りの３割というように、全体としては可もなく不可もなくといった状態ですが、８割が持病を抱えており、通院しています。今後は加齢にともない、健康状態は悪化していく可能性も考えられますが、心身の健康への予防的対策を行っている人も９割近く確認できます。予防的対策として７割の人が運動しており、４割の人がお酒やタバコを減らし、食事に気をつけるような心がけをしています。

登録者全員が生活保護を受給しており、年金を併用しているひとも23％程度確認できました。生活保護費や年金をなんとかやりくりしている人がほとんどで、自炊をしたり、安売りのお店で買い物をしたり、あるいは、お酒やギャンブルをひかえるなどの、浪費を防ぐ節約方法を実践しながら生活しています。生活保護受給後の気持ちや意識の変化については、病院にかかれることや、食事やお金の心配をしなくていいことなど、生存そのものを生活保護によって支えられることに安堵感をもつ一方で、引け目を感じる、周囲の目を気にする、人付き合いを控えてしまうといった、生活保護を受給することへの否定的な考え方によって、その人自身の振る舞いや人との接し方を萎縮させているといった側面があることも確認できました。

登録者の西成での生活期間は、10年未満の人たちと20年から30年の人たちの割合が多くなっています。西成に来た目的は、西成での生活期間が20年以下の人たちは生活保護受給を目的として来た人が多く、20年以上では仕事を目的としてやって来た人が多く、20年を境目として西成に来た目的が大きく異なります。住まいは、一般の賃貸アパートやマンションのほか、４割が簡易宿泊所を転用したアパートに住んでいます。一般の賃貸住宅に住んでいる人たちは、広さや築年数などばらつきのある多様な住宅に居住しており、簡易宿泊所転用アパートに住んでいる人たちは、半数以上が６㎡以下の非常に狭小な居住空間の中で生活していることがわかりました。また、賃貸アパート・マンションでも簡易宿泊所転用アパートにおいても、最低居住面積の水準を満たす住宅に住んでいる人は確認できず、風呂無し、トイレ共用のアパート・マンションに住んでいる人も多く確認できました。

普段の生活は一人で過ごすことの多い単調な暮らしではあるものの、ひと花センターでの活動やNPOや任意グループでの活動、地域でのボランティアなど地域活動への参加の機会が非常に多いことがわかりました。また、こうした活動や人との交流を通して多様な関係性を構築し、自らの生活を作り上げていくことで、つながりや暮らしの回復が可能になっています。

次に、ひと花センターの利用状況と利用後の変化についてまとめます。調査対象のうち6割程度が週１回以上コンスタントに利用しています。利用者の多くがプログラムへの参加を目的としているほか、地域や社会に貢献するためにひと花での活動に参加している人も多く確認できました。ひと花センターではレクリエーションのほか、農作業や公園の草刈り、地域清掃活動などを楽しみにしている利用者が多いようです。ひと花での活動を通して人や地域と交流したり、地域の役に立つことをしたりして、ひと花センターが利用者と社会の接点を作るような役割を担っていることが明らかになりました。ひと花での活動を積み重ねていくことで、ひと花センターは安心できて楽しく、人や社会とのつながりをもって過ごすことのできる居場所となり、登録者の日常生活において欠かすことのできない活動の場となっています。そして、今回調査対象の約7割が、ひと花センターの長期継続を強くのぞんでいます。

以上のように、ひと花センター登録者実態調査の結果から、登録者像と利用実態について簡単にまとめました。次章では、これらの結果にもう少し踏み込んで、常用の登録者と常用外の登録者を分けて、属性やひと花センターの利用についてみていきます。

Ⅱ．分析

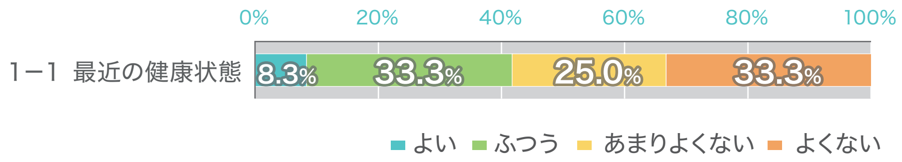
今回の調査では、ひと花センター登録者のうち、日常的に利用している人（常用）だけを対象とするのではなく、登録はしているが現在は利用していない人や以前は利用していたが最近は利用していない人（常用外）も対象に、調査を実施しました。ここでは、６つの調査項目について、常用／常用外別に集計した結果から、常用している登録者と常用外の登録者それぞれの傾向の違いを検討することで、今後のひと花センターにおける取組みや運営の課題について述べていきます。

１）常用外になった理由

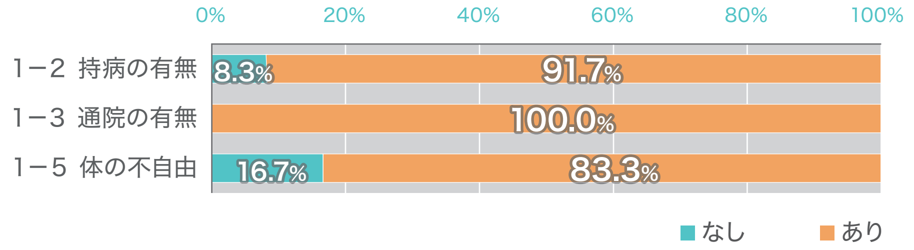
まず、常用外の人たちがなぜひと花センターを利用しなくなったかその理由についてみていきます。

常用外の人たちがひと花センターを利用しなくなった理由に、体調の悪化を挙げた人たちが50%となっていますが（P61 図８－６）、ここではこれらの体調の悪化した人たちの健康状態について詳しくみていきます。まず、最近の健康状態については、あまりよくない、よくないと回答した人が58.3%となっています（図Ⅱ－１）。次に持病については、91.7%の人たちに持病があり、100%の人が通院しています。また、体の不調がある人は83.3%となっており、健康状態が不調であるのは一目瞭然です。さらに、持病の内容や体の不調について自由回答の内容を詳しくみていくと、持病としては高血圧、脳梗塞後遺症、糖尿、リウマチ、ぜんそくが多く挙げられ、体の不調に関しては、手足のしびれ、足腰の痛み、歩行困難、視力の低下などを挙げています。数字としてはあらわれてきませんが、個別にヒアリングしてみると、急病で入院した人や手術を受けた人たちも確認できました。持病による慢性的な症状の悪化なのか、それとも加齢による身体的機能の低下なのかはここでははっきりしませんが、体の不調の詳細な状態を見ると外出することに困難を抱えていることは明らかです。体調悪化による身体機能の低下により外出が困難になることで活動範囲が一気に狭まり、ひと花センターの利用ができなくなった人が一定数存在することが確認できました。

図Ⅱ－１　最近の健康状態（常用外）



図Ⅱ－２　持病・通院・体の不調（常用外）

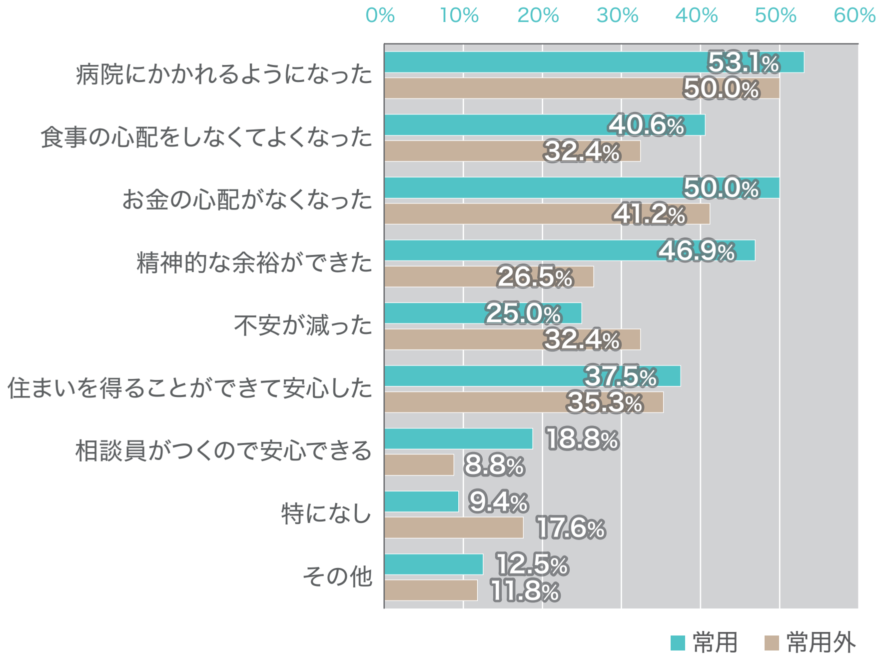


２）生活保護を受給してよかったこと／よくなかったこと

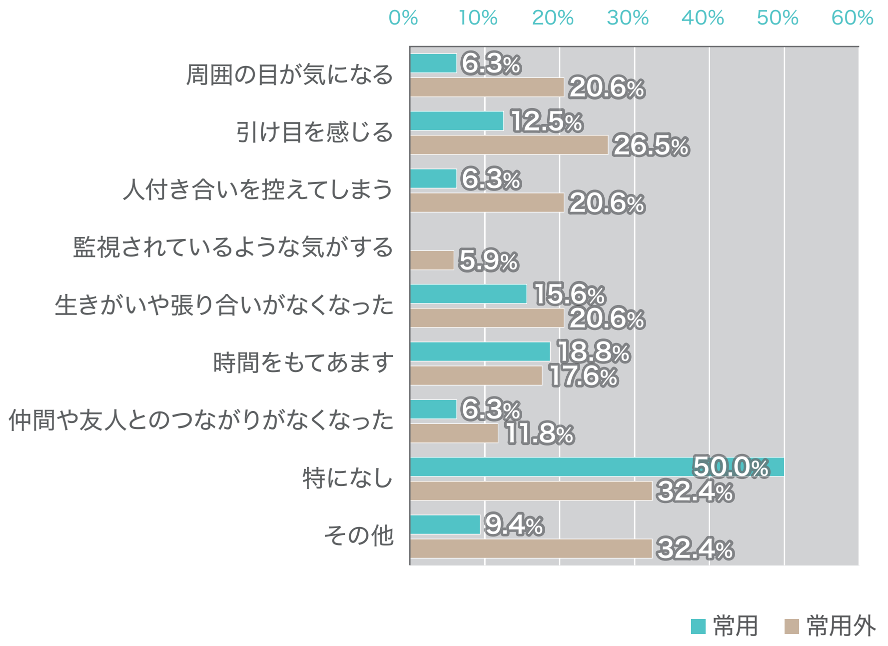
生活保護を受給して良かったことについての質問では、精神的な余裕ができたという回答が、常用は46.9%であるのに対し、常用外は26.5%と大幅に低い値になっていること以外大きな違いは見られません（図Ⅱ－３）。しかし、生活保護を受給してよくなかったことについての質問では、いくつかの項目において常用／常用外で大きな違いが確認できます。まず、周囲の目が気になるは常用が6.3 %に対し、常用外が

20.6%、引け目を感じるが常用が12.5%に対し、常用外が26.5%、人付き合い控えてしまうが常用が6.3%に対し、常用外が20.6%、監視されているような気がするが常用０%に対し、常用外が5.9%となっており、時間を持て余す以外は、常用外の人が生活保護を受給してよくなかったことを多く回答する傾向にあることがわかります（図Ⅱ－4）。これらの差異の大きな項目は、生活保護を受給することへの否定的な考えや、世間への申し訳なさのような感情が、人や地域との接し方まで抑制していることを示唆しており、それが結果としてひと花センターからも足を遠のかせている一つの要因である可能性も考えられます。

図Ⅱ－3 生活保護を受給してよかったこと



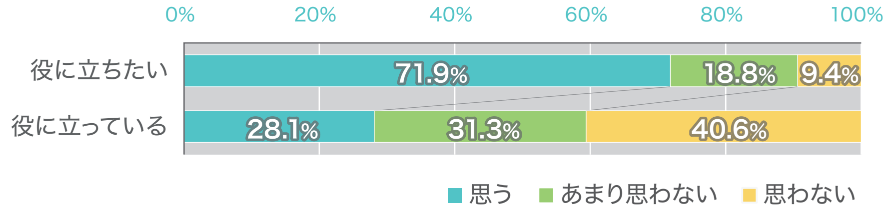
図Ⅱ－4 生活保護を受給してよくなかったこと



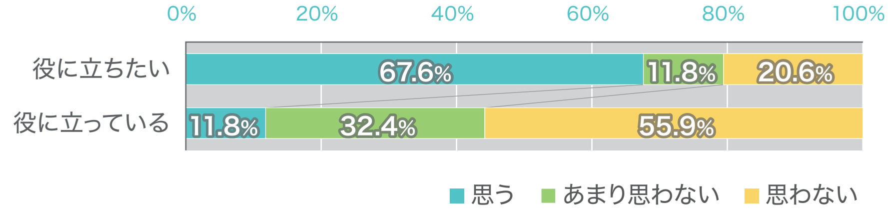
3）地域の役に立ちたいか／役に立っているか

地域の役に立ちたいか、実際に役に立っているかという自己有用感について常用／常用外での違いを示しました。地域の役に立ちたいという意識については、常用／常用外ともに思うと回答した人は７割程度で、常用外が思わないと回答した割合が常用に比べて高くなっています。実際に地域や社会の役に立っているかについては、常用の28.1%が思うと回答している（図Ⅱ－5）のに対し、常用外は11.8%、半数以上の55.9%が思わないと回答しています。また、役に立ちたいという希望と、実際に役に立っているという意識の間には、常用／常用外ともに大きなギャップがあり、常用より常用外のほうがこのギャップが大きく現れていることが確認できます（図Ⅱ－6）。常用の人たちのほうが、ひと花センターでのプログラム参加をとおした地域貢献の機会が多く、それが自己有用感を高める要因となっていると考えられます。今後はこのギャップをいかに小さくしていくかが重要な課題になってくるでしょう。ギャップの大きい人たちに対しては意欲をくみ上げる仕組みづくりが必要であると考えられます。

図Ⅱ－5 自己有用感の希望と実際（常用）



図Ⅱ－6 自己有用感の希望と実際（常用外）



4）つながりの欠如と孤立

ここでは、登録者のつながりの欠如の実態について見ていきます。登録者調査の人や地域とのつながりに関する以下表Ⅱ－1の４項目のそれぞれの重なりをみることで、登録者のつながりの欠如と孤立の状況について明らかにしていきます。表Ⅱ－1は、人や地域とのつながりを示す項目において“ない”あるいは“いない”と答えた人たちの割合（全体、常用、常用外）を示しています。これをつながりの欠如の割合とし、４項目中３項目の重なりを集合図で示し、孤立の実態を４つのパターンから見ていきます。

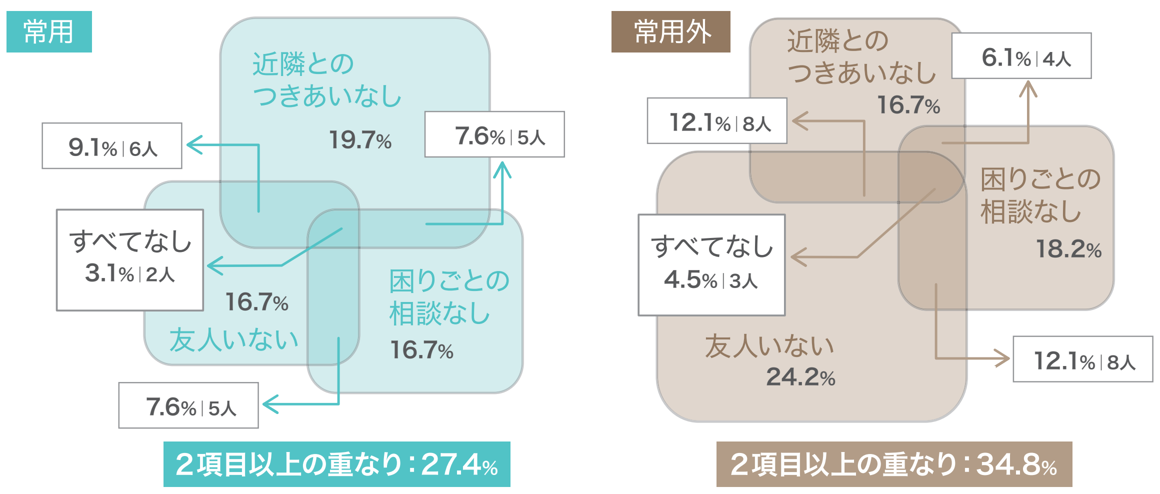
表Ⅱ－1　つながりに関する項目での“なし”の割合

項目	全体	常用	常用外
4－① 近所や隣人とのつきあいがない	36.4%	19.7%	16.7%
4－② 共通の話題や趣味をもつ友人がいない	40.9%	16.7%	24.2%
4－④ 困ったときに相談できる人がいない	34.8%	16.7%	18.1%
6－④ 地域の行事や活動への参加していない	43.9%	13.6%	30.3%

類型①　近隣つきあいなし―友人なし―困りごと相談なし（図Ⅱ－７）

それぞれの項目の重なりを常用／常用外別に見ていくと、近所付き合いがなく困りごとの相談相手がいない人は、常用7.6％、常用外6.1％となっています。次に、近所付き合いがなく友人がいない人は、常用9.1％、常用外12.1％となっています。困りごとの相談相手がなく、友人もいない人が、常用7.6％、常用外12.1％となっています。さらに、この３つの項目がすべて“なし”である人は、常用で3.1％、常用外で4.5％確認できます。これらの項目が２つ以上重なり合っている部分の合計（重複部分も含む）は、常用は27.4％、常用外は34.8％となっています。

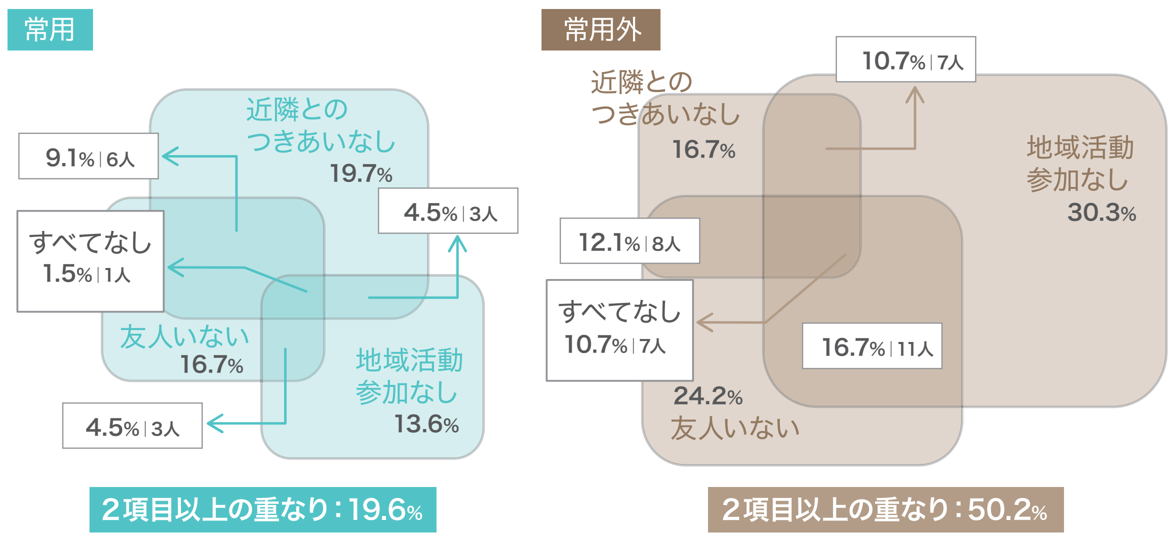
図Ⅱ－7　近隣ー友人ー困りごと相談



類型②　近隣関係―友人―地域活動（図Ⅱ－８）

次に、近所付き合いがなく地域活動に参加していない人は、常用4.5％、常用外10.7％となっています。地域活動に参加せず、友人もいない人は、常用4.5％、常用外16.7％となっています。いずれもなしは、常用では1.5％、常用外では10.7％確認できます。（以下、重複分の説明は省略します）これらの項目が２つ以上重なり合っている部分の合計は、常用は19.6％、常用外は50.2％となっています。

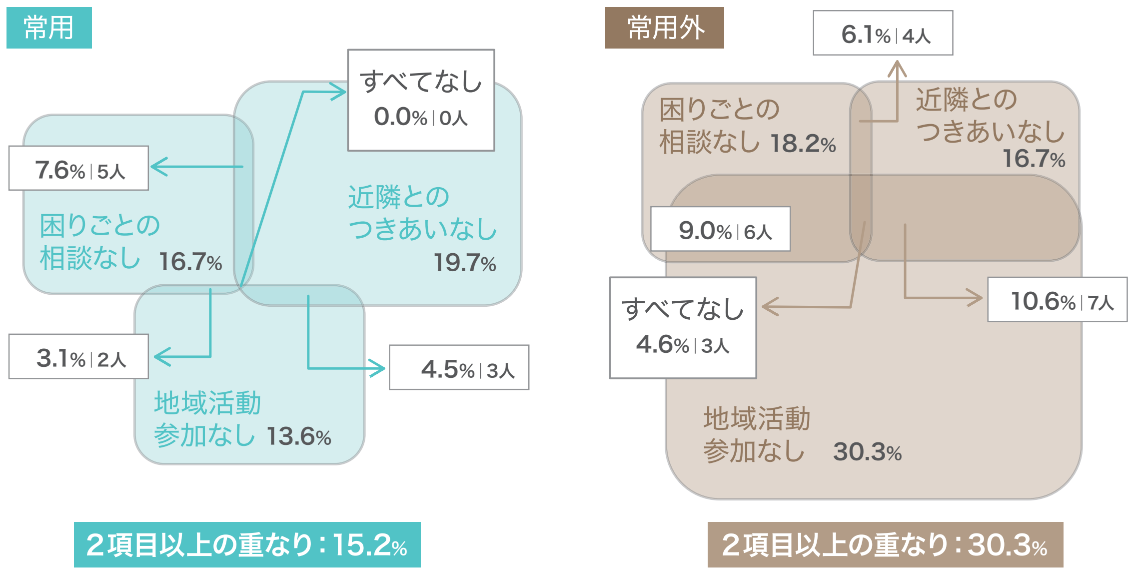
図Ⅱ－8　近隣ー友人ー地域活動



類型③　近隣関係―困りごと相談―地域活動（図Ⅱ－９）

次に、地域活動に参加せず、困りごとの相談相手もいない人は、常用3.1％、常用外9.0％となっており、すべてなしは、常用0.0％であるのに対し、常用外は4.6％となっています。これらの項目が２つ以上重なり合っている部分の合計は、常用は15.2％、常用外は30.3％となっています。

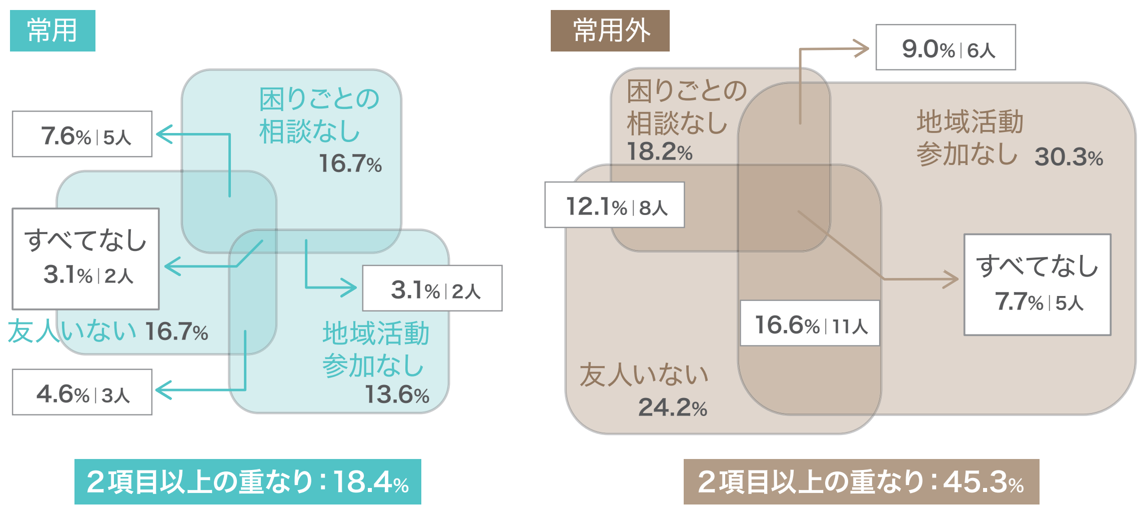
図Ⅱ－9　近隣ー困りごと相談ー地域活動



類型④　友人―困りごと相談―地域活動（図Ⅱ－１０）

最後に、地域活動への参加がなく、友人もいない人は、常用4.6％、常用外16.6％となっており、すべてなしは、常用で3.1％、常用外で7.7％となっています。これらの項目が２つ以上重なり合っている部分の合計は、常用は18.2％、常用外は45.3％となっています。

図Ⅱ－10　友人ー困りごと相談ー地域活動



以上、４つの類型それぞれで確認した結果、２項目以上のつながりの欠如は、常用の場合平均で２割程度、常用外の場合は平均で４割程度確認できました。常用／常用外の大きな違いは、常用の場合、類型の項目に地域活動が入るとつながりの欠如の度合いが低くなるのに対し、常用外の場合は、地域活動が項目に入るとつながりの欠如の度合いが高まることがわかります。これはつまり、常用の人たちのつながりは、近隣や友人関係よりも地域活動によって保たれており、常用外の人たちは、地域活動よりも近隣や困りごとを相談できる人との関係によってつながりが保たれているということを意味しています。

また、この中でつながりを一切持たない人は、常用は２％程度、常用外は７％程度確認できました。常用の人たちの場合は、あらゆるつながりが欠如していても、ひと花センターに通うことで人や地域との接触の機会を持つことができるので、社会的な孤立を予防できると考えることができます。しかし、常用外の人たちの場合は、仮につながりが欠如しがちな状況にあっても、例えば、行きつけのお店のようにお金を払っていることのできる場所や、図書館、公園などのように一人でそこまで移動し一人で過ごすような場所があれば、孤独や孤立といったことを意識することはあまりないかもしれません。しかし、そこに通うことのできるお金や、そこまで移動できて過ごすことのできる健康状態が損なわれると、孤立の度合いが一気に高まる可能性が考えられます。

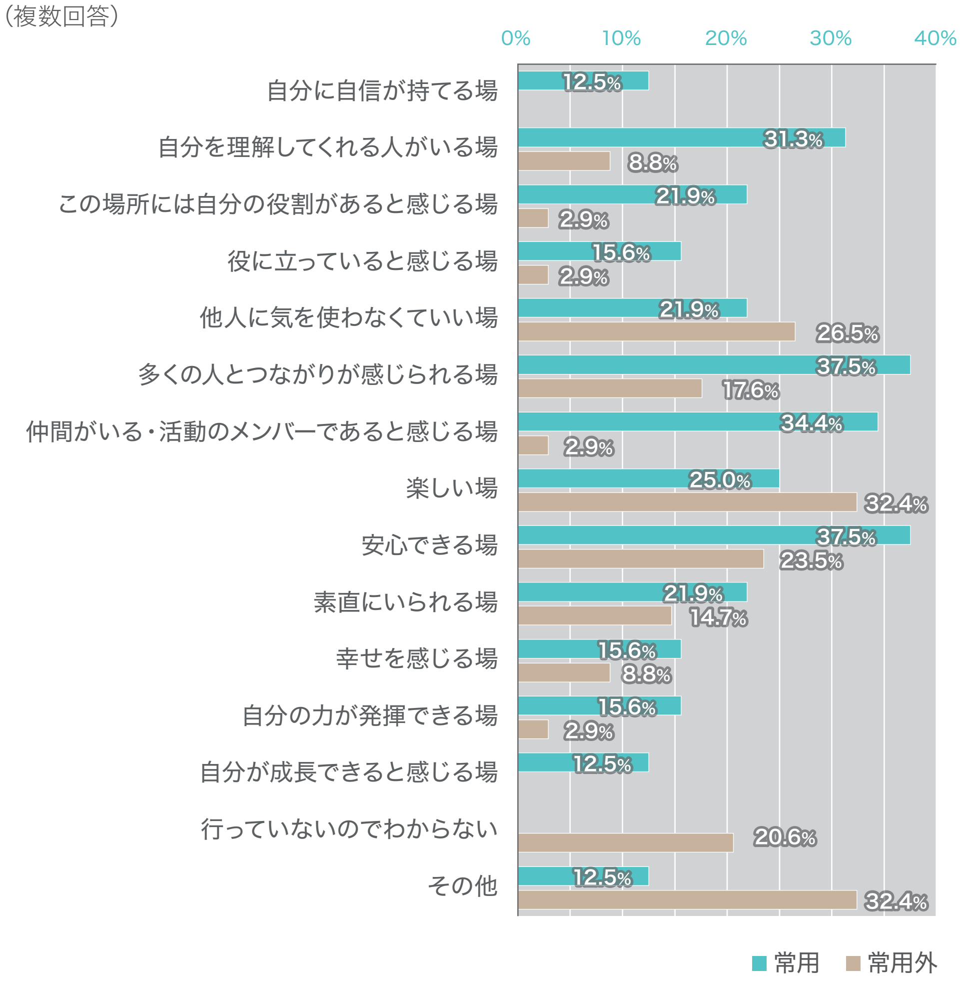
このように、現状では孤立することが可能になっているけれども、つながりの束の少ない常用外の人たちにいつ訪れるかもわからない孤立リスクに対し、具体的な働きかけも必要になってくるかもしれません。また、健康が損なわれることによる孤立リスクは、常用の人たちにも同様に起こりうるものです。ひと花センターは居場所としては十分に機能しつつありますが、孤立を防ぐ／なくすためには、単に居場所の提供だけではなく、介護事業所や福祉事務所などと連携した安否確認の機能も今後必要になってくるかもしれません。

５）居場所としてのひと花センター

P62 ８−⑥で、ひと花センターがどのような居場所になっているかたずねました。これを常用／常用外別にまとめてみました（図Ⅱ－１１）。図からもわかるように、居場所としてのひと花センターの意味は、常用と常用外では随分違いがあるようです。常用の場合は、上位が安心できる場所（37.5%）、多くの人とつながりが感じられる場所（37.5%）、これに、自分を理解してくれる人がいる場所（31.3%）が続きます。常用外の場合は、楽しい場所（32.4%）、他人に気を使わなくていい場所（26.5%）、安心できる場所（23.5%）となっています。常用外の場合は、過去に一時期来ていた期間、他人に気を使わないで楽しく過ごせる場所というように、一時的な利用の中での一期一会の交流を楽しむという短期的な利用であることが読み取れます。一方で、常用の人たちにとってのひと花は、多くの人とのつながりの中で、相互に理解し合い、それが安心する場所となっていっていると理解できます。常用の人たちが、ひと花に関わる人たちの中でじっくりと関係を築きながら、自らが安心できる場所を作り上げ、帰属意識や仲間意識を高めてきたことを物語っているようです。

図Ⅱ－11　ひと花はどのような居場所か

（複数回答）



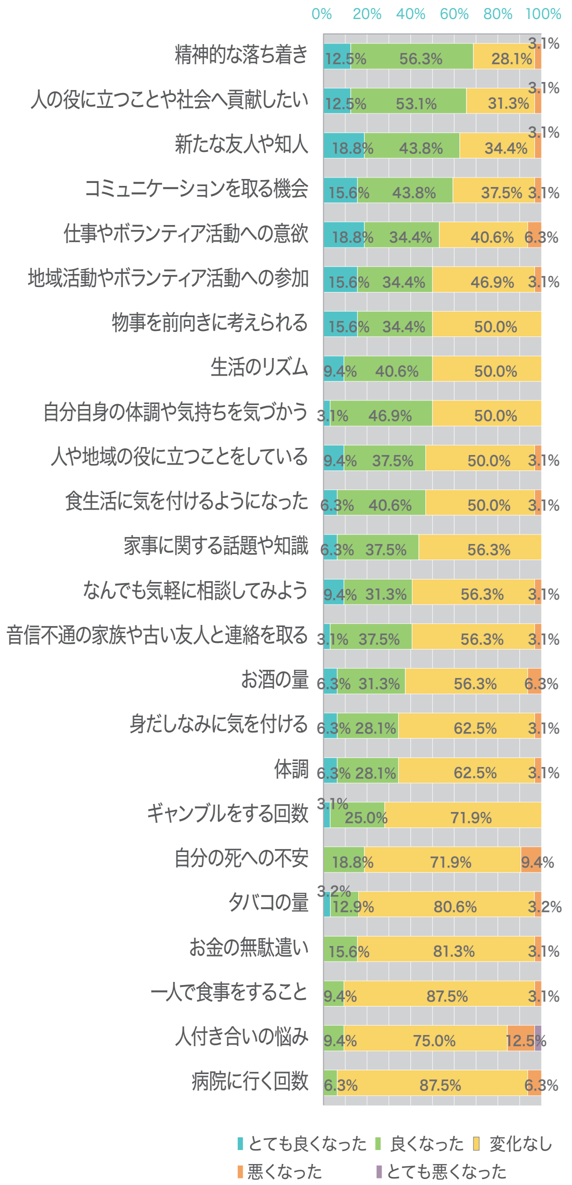
６）ひと花センター利用後の変化

・常用／常用外の比較

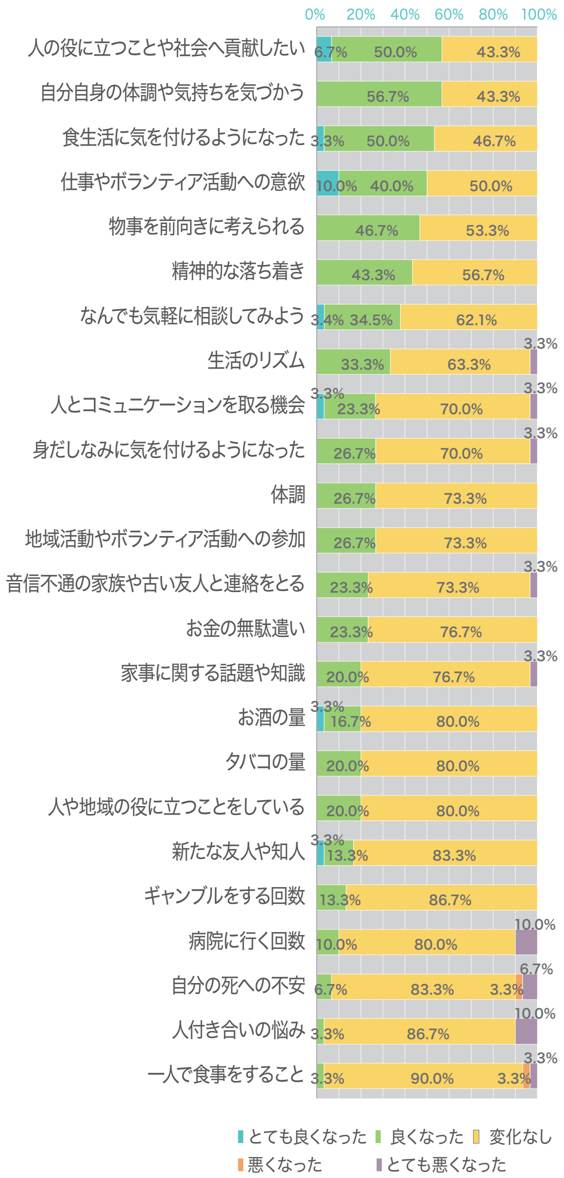
９章のひと花センター利用後の変化についての質問への回答を、常用／常用外別に図にまとめてみました。尺度の表現は若干異なりますが、よい変化／悪い変化の尺度でまとめています（図Ⅱ－１２、図Ⅱ－１３）。この図は、よくなった、とてもよくなった、の合計を降順に並べています。また、常用外の人たちは、現在ではひと花に通っていない人たちですが、以前通っていた時点での変化についてたずねています。

「良くなった」以上の変化の割合が高い項目を見ていくと、常用は、精神的な落ち着き、人の役に立つことや社会へ貢献したい、新たな友人知人、コミュニケーションを取る機会、仕事・ボランティアへの意欲、地域活動ボランティアへの意欲、が上位に確認できます。常用の人たちは、精神的に落ち着いて、人との関わりや地域との関わりによい変化が現れてきたと解釈できます。一方、常用外は、人の役に立つことや社会貢献したい、自分自身の体調や気持ちを気づかう、食生活に気をつける、仕事やボランティア活動への意欲、物事を前向きに考えられる、精神的な落ち着きが上位に確認できます。常用外の人たちの場合、上位に、自分自身の体調や気持ちを気づかう、食生活に気をつける、物事を前向きに考えられるといった項目が確認できることから、自分自身の内面によい変化があったと感じている傾向が強いことがわかります。常用の人たちが、人や地域とのつながりのような外へ向いた変化を感じているのと比較すると、常用外の人たちは、自分自身と向き合うような内向きの変化を感じているようです。

図Ⅱ−12　2014年度（常用）



図Ⅱ−13　2014年度（常用外）

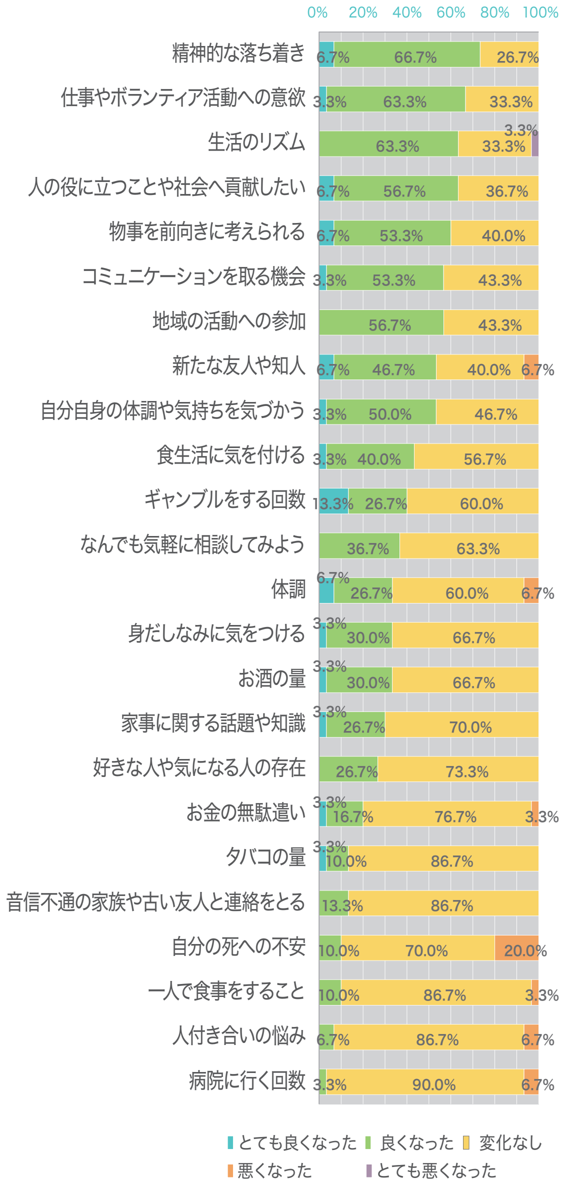


・２０１３年度調査との比較

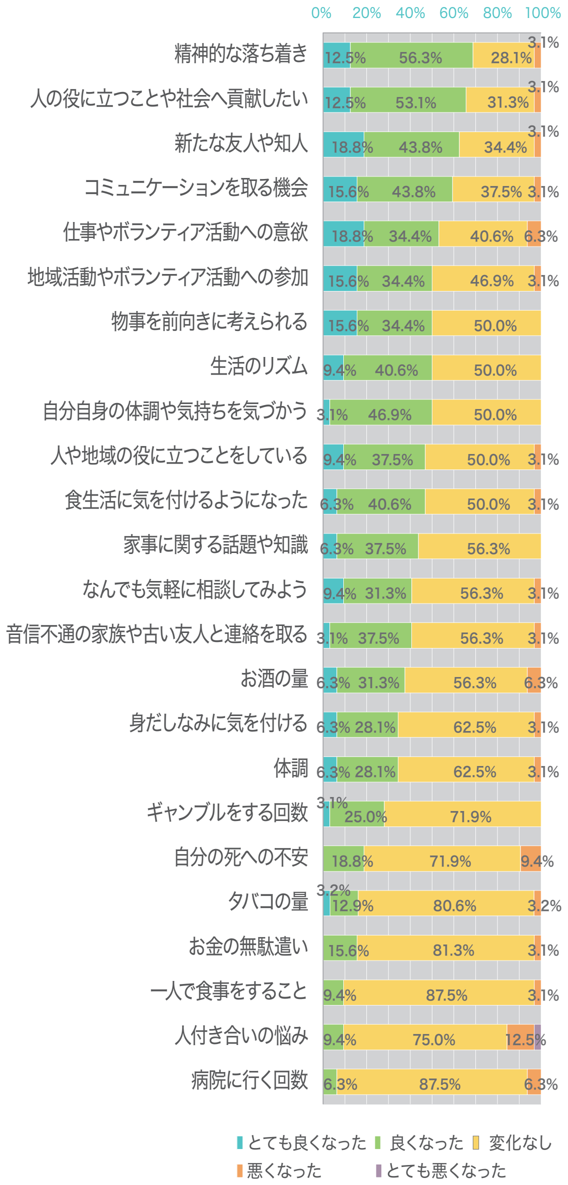
ひと花センター利用後の変化について、2013年度ひと花センター利用者実態調査での同じ項目の回答結果と今年度の結果を比較してみました（図Ⅱ－１４、図Ⅱ－１２）。2013年度調査は、常用者のみを対象としているので、比較するデータは、2014年度の常用者のデータを使用します。また昨年度と質問項目が一部異なっている部分もあります。こちらも、よくなった、とてもよくなった、の合計を降順で図化しています。順位に若干の変動はあるものの、全体的な傾向としては、“とても良くなった”と回答している割合が2013年度と比べて2014年度は増加しています（2013年度のとても良くなったは平均3.2%、2014年度は平均7.7%）。とくに、上位の精神的な落ち着きや、地域や人とのつながりについての項目ではとても良くなったが2013年度と比べて大幅に増加していることがわかります。

一方で、生活のリズム、物事を前向きに考えられる、が上位から中位に、ギャンブル、体調が中位から下位にそれぞれ移動しています。また、下位にあった音信不通の家族や古い友人と連絡をとる、家事に関する話題や知識が中位に上昇しています。ひと花センターを利用するようになり、新しい友人知人が増える中で、親族友人と連絡を取ってみようという気持ちの変化が生まれ、料理などのプログラムを通して、家事のスキルがあがったり生活の知恵が増えたりするなどして、ひと花センターを利用する以前ではなし得なかったつながりの回復や生活を整えていく力が身に付き、生活を再構築していることがうかがえます。

図Ⅱ−14　2013年度



図Ⅱ−12　2014年度（常用）



以上、登録者の利用状況別（常用／常用外）に、健康状態、生活保護受給への意識、自己有用感、つながりと孤立の実態から、生活実態について掘り下げ、居場所としてのひと花センターの意味や、ひと花センター利用後の変化について詳しく検討してみました。次章では、ひと花センターに関わりのある地域の人たちに対して実施したアンケート調査の結果を整理し、これまでの登録者調査の分析結果とあわせて検討し、最後にひと花センターの今後の課題について述べていきます。

Ⅲ．地域調査について

■調査の概要「ひと花センターに関するアンケート調査」

１）調査の目的

日頃ひと花センターの活動に関わりを持つ地域の人たちのひと花センターとの具体的な関わりを把握し、ひと花の活動に対する意識、活動そのものへの評価を明らかにすることを目的としています。

２）調査対象者

調査対象者は、ひと花センターと関わりのある近隣地域の人たちです。ひと花のイベントや催し（ゆめひろばなど）に参加したことのある個人、ひと花センターと関わりのある団体、町会関係者などです。それぞれ、個人としての立場でアンケートに回答してもらいました。回答者の年代は10代から80代までの67人（男性38人、女性27人、無回答２人）となっています。

３）調査方法

ひと花センターに来所した際に質問紙を配布し、その場で各自回答記入してもらいました。また、普段関わりのある各団体を通して所属する職員に質問紙を配布、各自回答記入、後日回収しました。

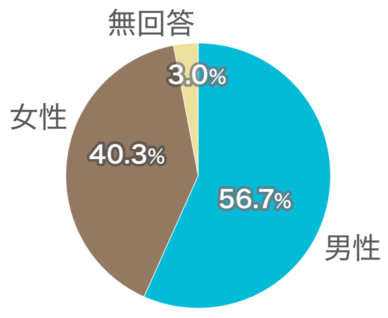
４）調査期間

2015年３月

１．性別と年齢

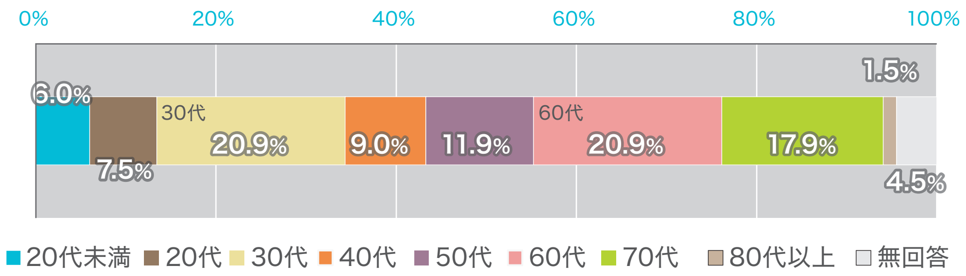
a）回答者の性別は、男性が56.7%、女性が40.3%となっています（図Ⅲ－１）。

図Ⅲ－1 性別



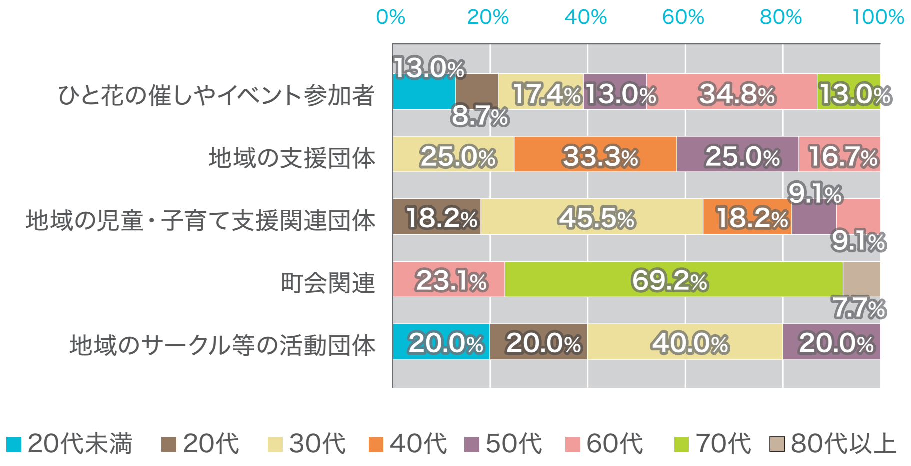
b）回答者の年齢層は、10代から70代までと幅広いです。30代と60代がもっとも多く、それぞれ20.9%です。70代が17.9%、50代が11.9%と、中高年が多くなっています（図Ⅲ－２）。

図Ⅲ－2 年齢



c）図Ⅲ－３は回答者の属性を年齢別に表しています。図には示していませんが、回答者の全体の属性は、ひと花の催しやイベントの参加者（35.9%）、地域の支援団体に所属する人（18.8%）、地域の児童・子育て支援関連団体に所属する人（17.2%）、町会関係者（20.3%）、支援を主体としない地域のサークルなどの活動団体に所属する人（7.8%）となっています。各属性の年齢別の傾向をみると、ひと花の催しやイベント参加には、40歳代と80歳代以外の年齢がまんべんなく参加していることが確認できます。地域の支援団体や児童子育て支援関連団体は、20代から60代まで確認できますが、児童・子育て関連の団体では20代の割合が高く、全体的に年齢層が若くなっています。支援活動を主体としない地域のサークル等の活動団体は、30代以下が80%を占めます。一方で、町会関係者は60代以上のみとなっており、70代が7割近くを占めています。

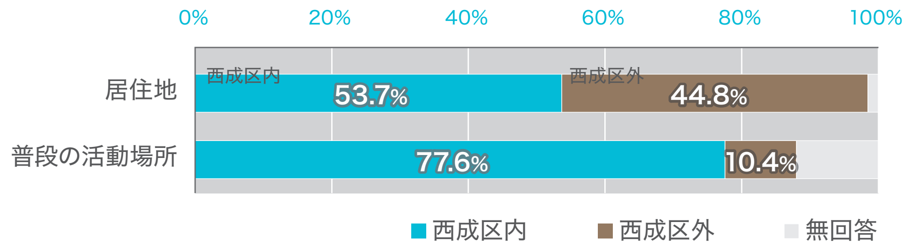
図Ⅲ－3 年齢と属性



２．居住地と活動場所

居住地は、西成区内が53.7%、西成区外が44.8%となっています。西成区内に居住している人が若干多くなっています。普段の活動場所は、西成区内が77.6%、西成区外が10.4%となっています。（図Ⅲ－４）。

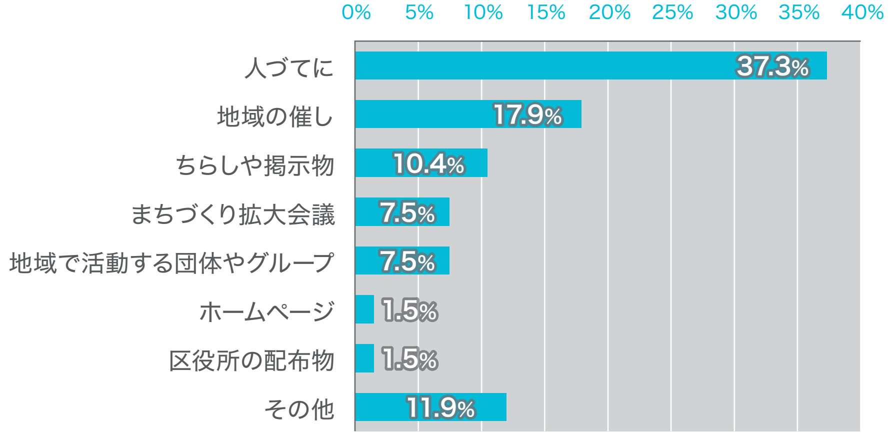
図Ⅲ－４ 居住地と普段の活動場所



3．ひと花プロジェクトを何で知りましたか

ひと花プロジェクトを知ったきっかけは、人づてに知った（37.3％）がもっとも多く、次に、地域の催し（17.9％）、ちらしや掲示物（10.4％）が続きます（図Ⅲ－5）。また、釜ヶ崎周辺のまちづくり拡大会議などの地域のまちづくり活動、地域で活動する団体やグループ（ココルーム、こどもの里など）を通して知った人が、それぞれ7.5％確認できます。

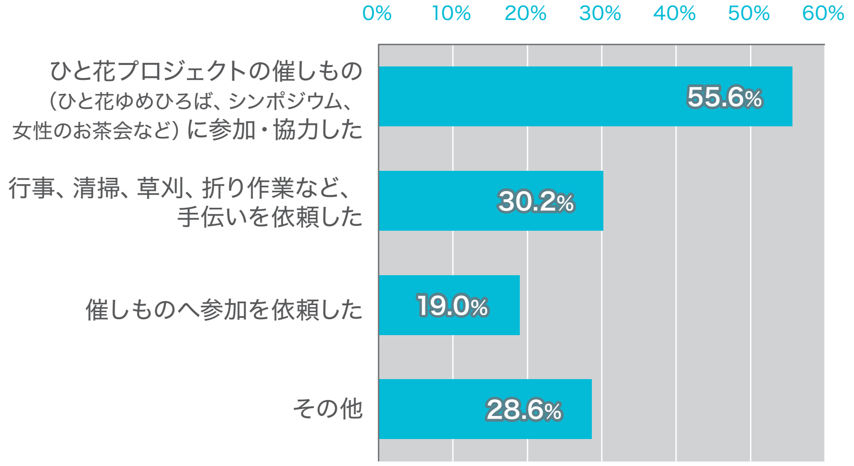
図Ⅲ－5　ひと花プロジェクトを知った理由



4．ひと花プロジェクトとの関わり

回答者とひと花センターとの関わりは、ひと花プロジェクトの催し物に参加したことでの関わりが55.6％となっており、半数以上を占めます。次に、行事、清掃、草刈りなどの作業の手伝いを依頼したが30.2％、催し物への参加を依頼が19.0％となっています（図Ⅲ－6）。

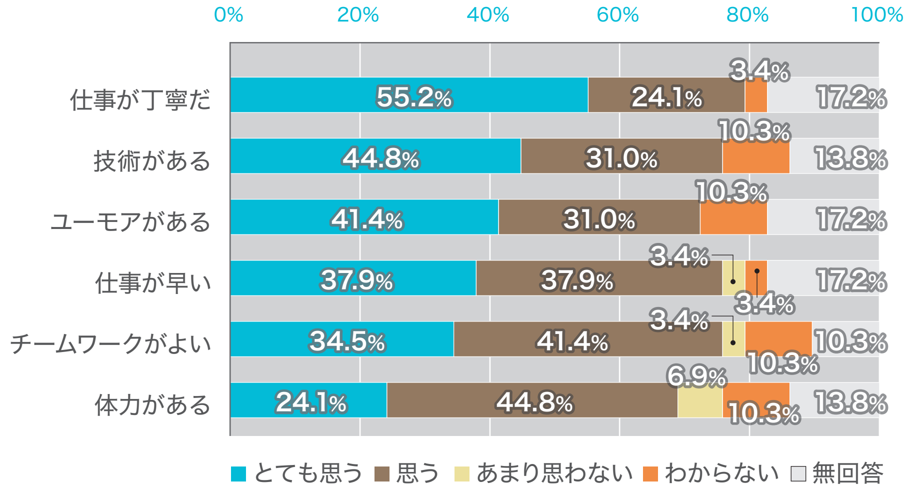
図Ⅲ－6　ひと花とのかかわり



a－1）依頼内容の評価

ひと花センターに作業の依頼をしたことのある個人・団体に、依頼内容の評価を行ってもらいました（図Ⅲ－7）。作業の丁寧さを評価している人がもっとも多く、とても思うが55.2％、思うが24.1％と合計8割が良い評価をしています。これに、技術がある（とても思う44.8％）、ユーモアがある（41.4％）が続きます。作業が早い、チームワークがよい、については、とてもそう思う、思う、の合計は多いのですが、あまり思わないがそれぞれ3.4％確認できます。体力があるについては、登録者が全員高齢ということもあり、他と比較して評価が低く、とても思う、思う、の合計が68.9％、あまり思わないが6.9％確認できます。

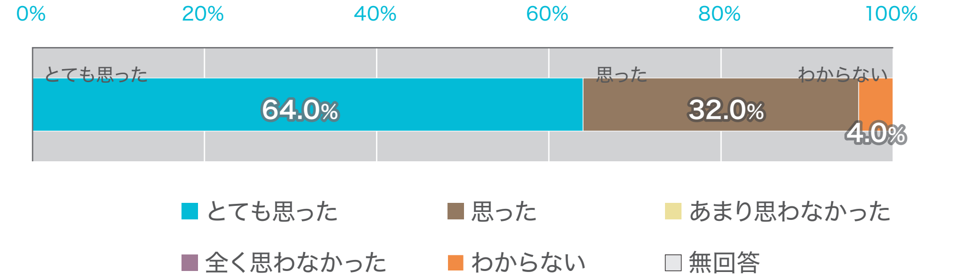
図Ⅲ－7　依頼内容の評価



a－2）また依頼したいと思ったか

ひと花センターにまた作業の依頼をしたいかたずねたところ、９割以上がまた依頼したいと回答しています。このうち、とても思ったが64.0％、思ったが32.0％となっています（図Ⅲ－8）。

図Ⅲ－8　また依頼したいと思ったか



b－1）ひと花センターにかかわっての印象はどのようなものでしたか（自由回答）

ひと花センターと関わりのある人たちにひと花の印象をたずねたところ、多くの自由回答が得られました。率直な印象を簡単な言葉で表すようなコメントや、利用者や職員への具体的な印象、子どもとの交流を通したエピソード、居場所としての印象のほか、今後の課題に関することへの助言もありました。

＜率直な印象として＞

- あたたかみを感じた、アットホームな感じ、いいところと思った、たのしかった、きれい、過ごしやすい
- とてもあたたかい雰囲気で見ていてほっとする
- なごやか、ほんわか、あったか、まったりした感じがとても気持ちよく大変楽しかった
- 雰囲気がいい、楽しい場所、好印象、明るい、自由な感じがする
- スタッフの感じが良い、居場所となっていると強く感じた

＜利用者や職員への印象＞

- 散歩の際、何気に立ち寄らせていただいたときもみなさんで迎えてくださいました。
- とても楽しそう（スタッフがさまざまな配慮をしているのでしょう）。
- とても明るくきれいな空間でした。利用者さん・地域の方との区別がつかずみなさん楽しんでいらっしゃいました。
- みなさんがとてもあたたかかったです。入りやすかったです。
- みなさんが自分のできること、また、地域の人たちとの交流を一所懸命がんばっているのがわかります。
- みなさんよく動かれて積極的に活動されています。
- 参加者間のつながりが強く、参加者とスタッフの関係も外から見ていて、心快いように感じます。ただし、時々、「利用者」さんとして参加者のみなさんを扱う場面に対して、多少の違和感を感じます
- 頼りになる存在である。みなさんがいきいきとしている
- 野菜の説明を熱心にしてくださり、いきいきされているなと感じました。もっとこのような場があれば良いなとも思いました

＜具体的なエピソード：子どもたちとの交流から＞

- いつもとても親切で私たちの依頼にも親身になって一緒にとりくんでくださる。こどもたちとの関係、信頼関係もできていて、一緒に、遊び場を作っていっているという気持ちになります。
- お菓子がたくさん出たので子どもたちは大喜びでしたが、量がちょっと多い気がします。みなで紙芝居をして楽しく過ごせました。
- こどもたちと参加したが（二回）お菓子がたくさんでてきてびっくり。２回目は時間外であったにも関わらず、歓待していただき、申し訳なかったです

＜居場所としての印象＞

- 何か自分にできることにうれしくボランティアも楽しく、自分の居場所みたいな、自分がここにたしかにいる。ずっと部屋にこもってしまう自分が少しでも参加できることに感謝いたします。
- 今までの私は、行く場所がなく部屋にいることが多く、しかしひと花センターに顔を出すことで少し自分から行く場所ができ、ありがたいです。
- 世代間の人間関係が分断している今、子どもとおっちゃんのふれあい、また、さまざまな技術の継承などありがたかった

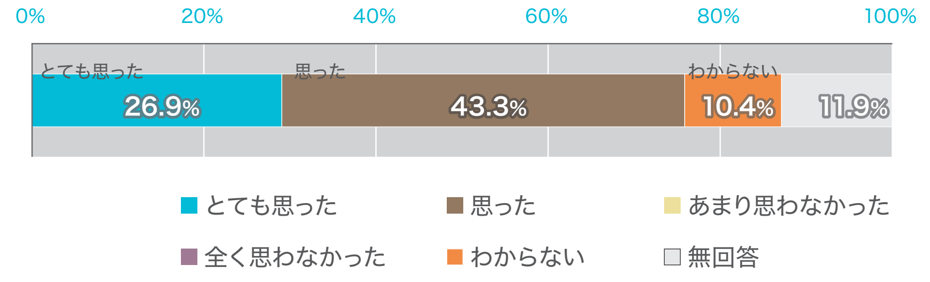
＜課題につながること＞

- 新聞が毎月カラーですので、広報に予算を割いていらっしゃる印象です。ひと花まつり？でコーヒーをいただきました。取組みの意義や利用者に比して施設が小さいのでは、と感じました。
- 今後をみていきたい
- 人間関係が難しそうだと感じました。
- ゆめひろばのように誰でも参加できるイベントをもっとふやしてほしい！

b－2）ひと花のプログラムや行事に再度参加したいか

ひと花プロジェクトのプログラムや行事に再び参加する意思についてたずねたところ、とても思ったが26.9％、思ったが43.3％となっており、7割以上の人が再びひと花の活動に参加したいと回答しています（図Ⅲ－9）。

図Ⅲ－9 ひと花のプログラムや行事に再度参加したいと思いましたか



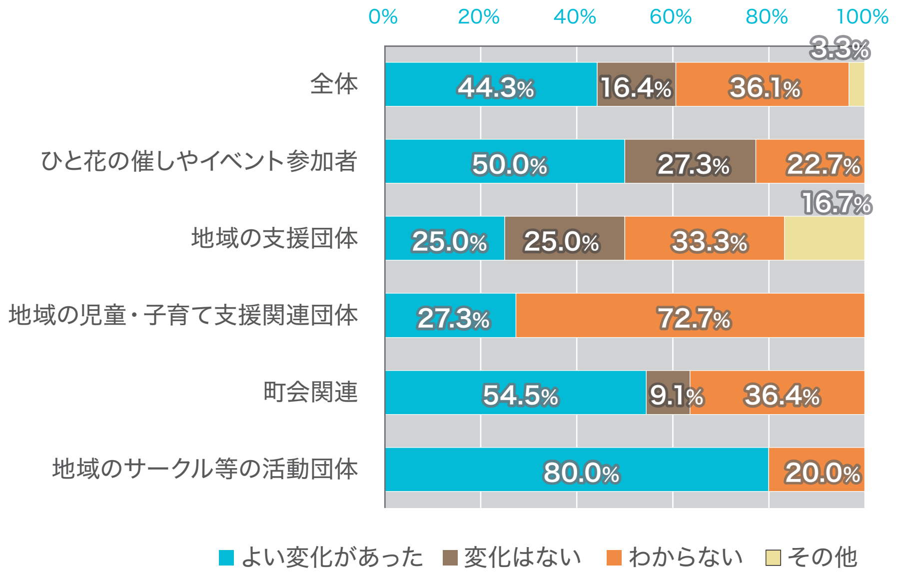
5．ひと花プロジェクト始動後の変化

ここでは、ひと花センター開設後のさまざまな取組みが、地域にどのような変化をもたらしたのか、回答者の意識と評価から明らかにしていきます。以下、９つの項目に関する変化を回答者全体と属性別にわけてみていきます。回答者の属性は図Ⅲ－３での属性分類を使用します。

①生活保護受給者へのイメージ

ひと花プロジェクトができて地域の人たちがもつ生活保護受給者に対するイメージに変化があったと思うか、については、全体では44.3％の人がよい変化があったと答えています（図Ⅲ－１０）。悪い変化があったと感じている人は確認できませんが、1.5割が変化はない（16.4％）、３割程度の人がわからない（36.1％）と回答しています。属性別にみてみると、イメージによい変化があったと回答したのは、地域のサークル等の活動団体が80.0％と非常に高くなっており、これに町会関連（54.5％）、ひと花の催しやイベント参加者（50.0％）が続きます。

図Ⅲ－１０ 生活保護受給者のイメージ



a）どのような変化を感じたのか自由に回答してもらったところ、以下のような声が聞かれました。

＜ひと花での取組みを通して＞

- 元気な方々が参加できるいろいろな活動プログラムがあり、生きるはりあいができたと思う
- 人間らしく輝いている姿を見ることができた。例えば、得意なことをいきいきとする、不慣れな紙芝居にまじめに取り組むなど
- 仕事があれば「一生懸命に」働かれていることを示せていると思います。花、とても綺麗です。
- 生保への偏った見方が強くあるけれど、実際に人と人が関わる機会をもった人や、間接的に読み物等で知った人には変化があったと思う。
- 仲間と力を合わせて前向きにいきているその姿を、その人々のキャラを具体的に見せることができるようになった。それまでは理屈だけの世界だった
- 人と関わろうとする姿勢、リハビリテーションになっている
- 人と人との関係が必要ということが示された

＜地域とのかかわり＞

- 地域内で出会った時に、「今日も帳合がんばったよー」等と声をかけてくれるようになりました。「いきいき」している印象をもちました。
- 地域の一員としての意識がお互いに深まった気がする
- 地域の方々、いろいろな面で協力をしてくれます
- 地域活動の清掃活動に参加してもらっていますが、回を重ねるごとに会話がはずんでいます
- 仲間ができて気持ちが明るくなり、ゆとりができたように感じられる
- 町中で参加者間であいさつをしたり、あつまっている姿をみたのが印象がよかった
- 周辺がきれいになった
- 雰囲気が明るく変わったと思う。

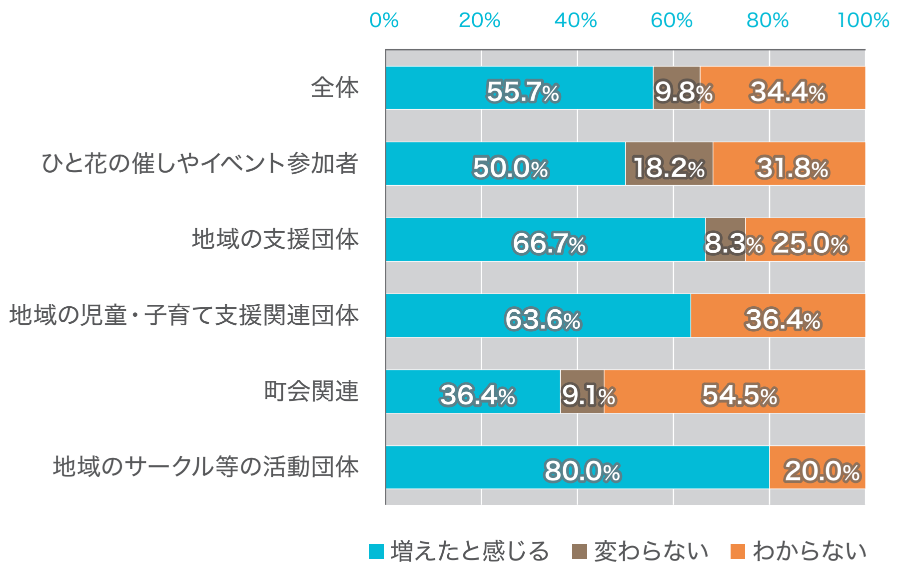
＜登録者以外でたまに立ち寄る人から＞

- ひきこもりがなくなった
- 何もしないより、何か人様のためにできること　自分がそうじのお手伝いができることに感謝している
- 活力を自分にもらった
- 生きていく意義があると思えるような活動だと思う

②単身高齢生活保護受給者と地域とのつながり

単身高齢生活保護受給者と地域のつながりについては、全体をみると、つながりが増えたと感じた人が55.7％確認できます。変わらないが9.8％、わからないが34.4％確認できます。属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が80.0％ともっとも高く、地域の支援団体（66.7％）、地域の児童・子育て支援関連団体（63.6％）が続きます。（図Ⅲ－１１）。

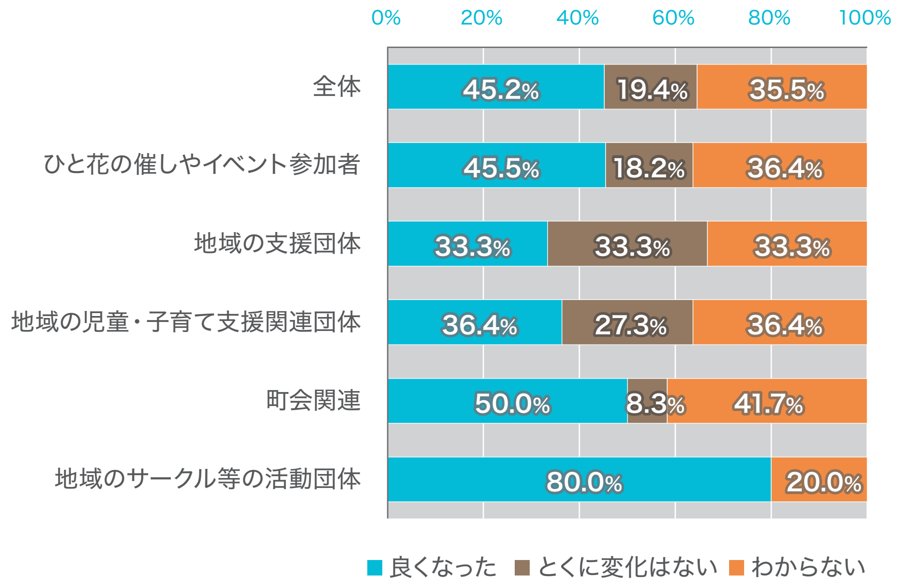
図Ⅲ－11　単身高齢生活保護受給者と地域のつながり



③地域のイメージ

ひと花プロジェクト始動後の地域のイメージに関しては、全体をみると、45.2％が良くなったと答えており、変化はないが19.4％、わからないが35.5％となっています。属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が80.0％ともっとも高く、町会関連（50.0％）、ひと花の催しやイベント参加者（45.5％）と続きます（図Ⅲ－１２）。

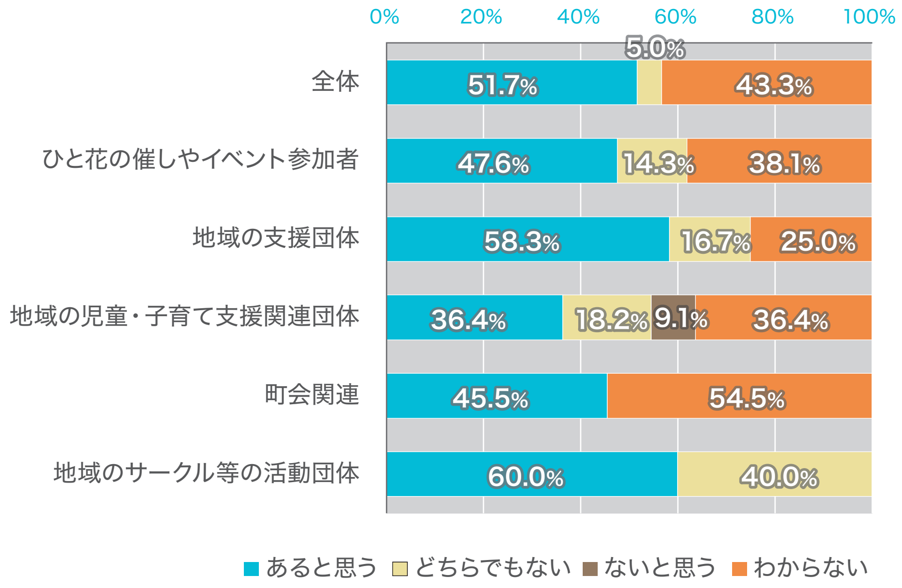
図Ⅲ－12　地域のイメージの変化



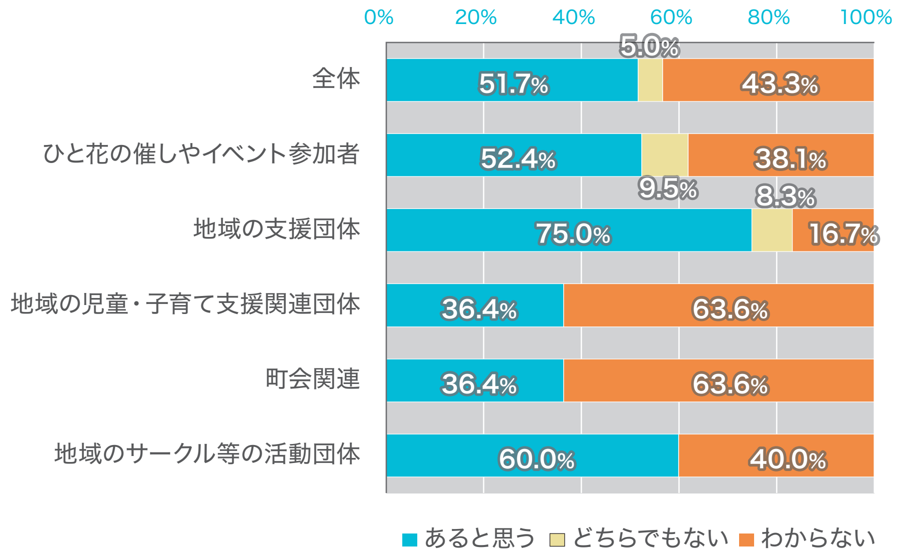
④ひと花センターの運営主管と運営体制

ひと花センターを行政が主管し、５つのNPOが協同で運営していますが、そのことのメリットの有無についてたずねました。全体をみると、両方の質問ともに、51.7％が、メリットがあると回答していますが、わからないという回答も43.3％と比較的高い割合確認できます（図Ⅲ－１３、図Ⅲ－１４)。行政が主管することのメリットについて属性別にみると、地域のサークル等の活動団体が60.0％、これに、地域の支援団体（58.3％)、ひと花の催しやイベント参加者（47.6％）が続きます。(図Ⅲ－１３)。５つのNPOが協同で運営するメリットに関しては、地域の支援団体が75.0％ともっとも高く、地域のサークル等の活動団体（60.0％)、ひと花の催しやイベント参加者（52.4％）が続きます（図Ⅲ－14)。

図Ⅲ－13　ひと花を行政が主管していることのメリット



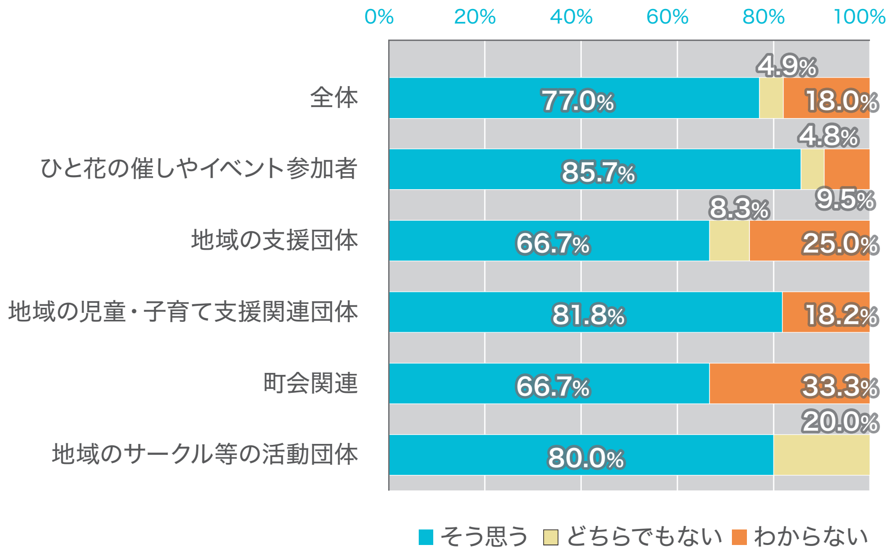
図Ⅲ－14　5つのNPOが協同で運営していることのメリット



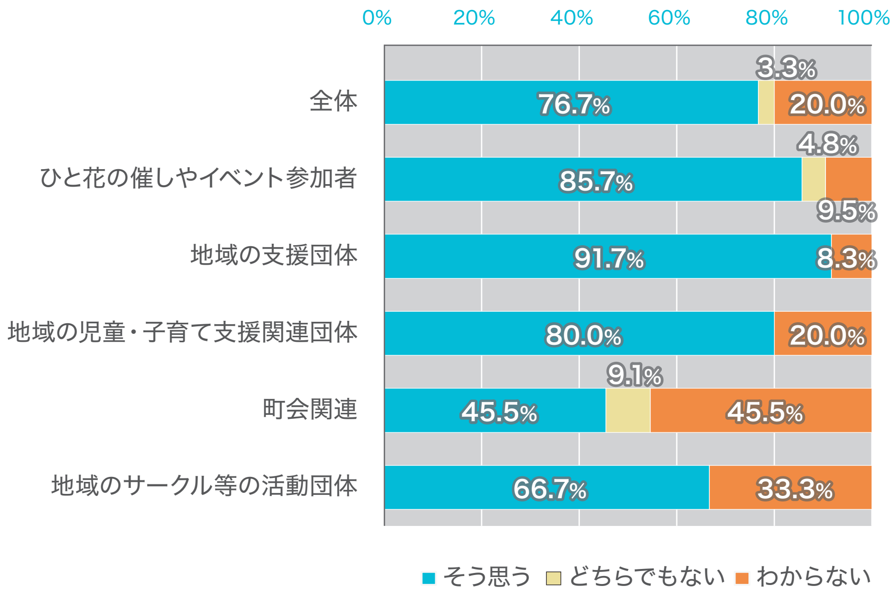
⑤ひと花センターができて助かったか／地域の力になっているか

次に、ひと花センターができたことによる地域への効果をたずねてみました。全体をみると、ひと花センターができて助かったかという問いについては、77.0％がそう思うと答えています（図Ⅲ－１５)。属性別にみると、ひと花の催しやイベント参加者が 85.7％、これに、地域の児童・子育て支援団体が 81.8％、地域のサークル等の活動団体が 80.0％と上位の項目はいずれも８割以上の高い値を示しています。次に、ひと花センターが地域の力になっているかという問いに関しては、全体をみると 76.7％がそう思うと回答しています（図Ⅲ－１６)。属性別にみると、地域の支援団体が 91.7％と非常に高い割合を示しています。これに、ひと花の催しやイベント参加者（85.7％)、地域の児童・子育て支援関連団体（80.0％）がつづきます。

図Ⅲ－15　ひと花ができて助かった



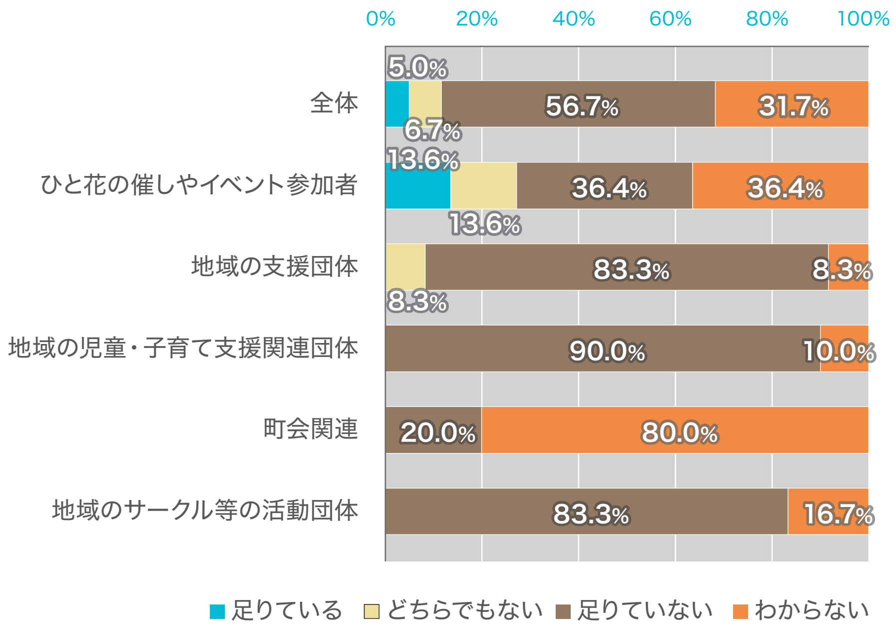
図Ⅲ－16　ひと花が地域の力になっている



⑥単身高齢生活保護受給者の居場所充足度

最後に、単身高齢生活保護受給者の居場所が地域内で充足しているかについてたずねました。全体をみると、足りていると回答した人は５％とごく少数となっている一方で、56.7％が足りていないと回答しています（図Ⅲ－１７）。属性別にみると、地域の児童・子育て支援関連団体に所属する人たちがもっとも足りていないと感じており（90.0％）、これに地域の支援団体（83.3％）、地域のサークル等の活動団体（83.3％）が続きます。一方、ひと花の催しやイベントに参加している人たちに、居場所が足りているという回答（13.6％）が唯一確認できます。これは、ひと花の催しイベント等をはじめ、地域の居場所資源を積極的に活用する居場所利用の当事者としての意識を反映していることがうかがえます。また、町会関連の人たちは、居場所が足りているかわからないと回答した人が80.0％にものぼり、町会以外の属性の人たちとの意識の差が明確に現れました。地域での支援活動を目的として活動する人たちと比較すると、町会関連の人たちは支援に関する当事者と関わる機会が限られ、また地域資源への関心や認知する機会も少ないので、判断が難しいのかもしれません。

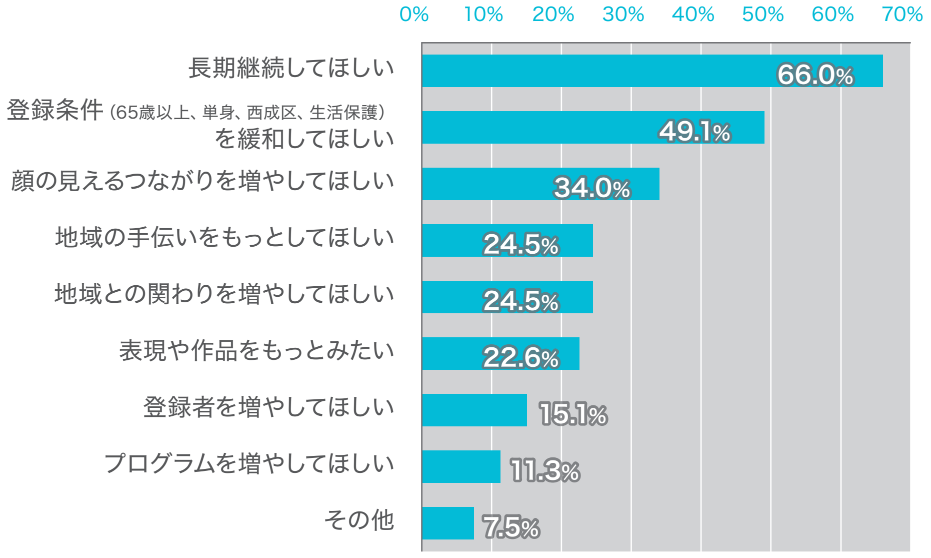
図Ⅲ－17 単身高齢生活保護受給者の居場所



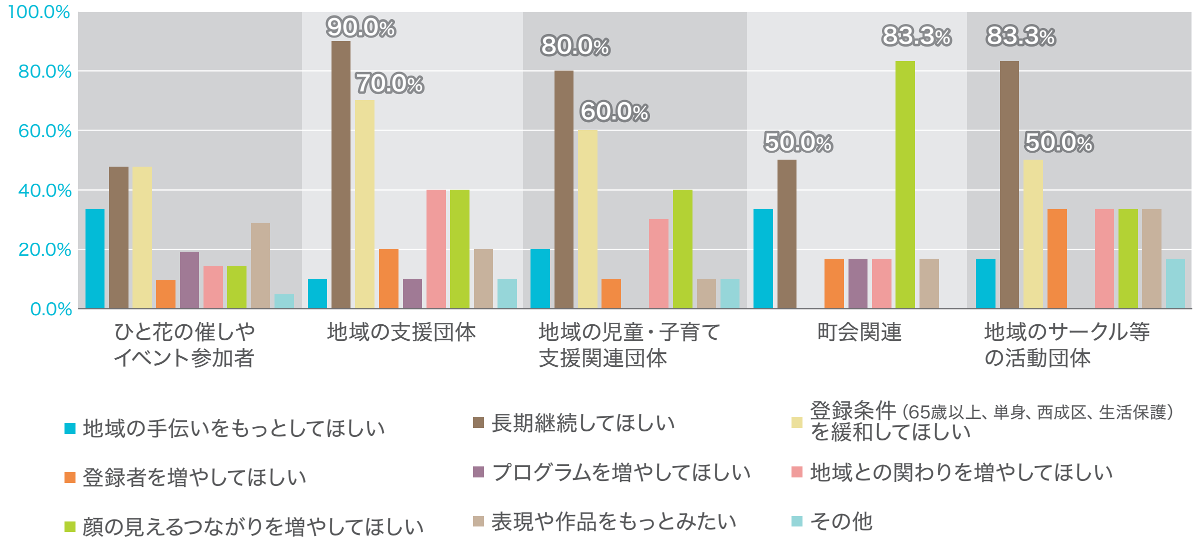
６．今後ひと花センターにのぞむこと

今後ひと花センターにのぞむことについてたずねました。もっとも多いのが、長期継続してほしい（66.0％）でした（図Ⅲ－１８）。これは、登録者がひと花にのぞむことと同様の結果になっています（P62 図８－８）。次に、登録条件の緩和が49.1％となっています。現在は、高齢の生活保護受給者のみを登録対象としていますが、登録条件を緩和してより多くの高齢者が利用できるような場所にしてほしいという要望を持つ人は半数程度確認できます。その他には、顔の見えるつながりを増やしてほしい（34.0％）、地域の手伝いをもっとしてほしい（24.5％）、地域との関わりをもっと増やしてほしい（24.5％）などの、地域とのつながりを強め、地域の役に立つことが期待されていることがうかがえます。さらにこれを回答者の属性別にみると、いずれの属性でも長期継続への希望が高く、地域の支援系の団体、活動団体での高さが目立ちます（図Ⅲ－１９）。一方で、町会関連の人たちはここでもほかとは異なる傾向を示しており、顔の見えるつながりを増やしてほしいという希望が83.3％確認できました。普段、ひと花センターをはじめとする支援の現場や地域活動の場での接点が薄いことから、まずは顔の見えるつながりの構築から関わりをスタートさせることを希望していることがわかります。

図Ⅲ－18 今後ひと花にのぞむこと



図Ⅲ－19 今後ひと花にのぞむこと（属性別）



最後に、回答者のみなさんから寄せら れたひと花プロジェクトへのアドバイスやエールを掲載します。日頃の地域との関わりの中からの応援、居場所としての期待、希望・要望や今後への課題など、多くの声を寄せていただきました。

ひと花プロジェクトへのアドバイスやエール

＜地域との関わりから＞

- 地域の手伝いをしてくれてありがとうございます。
- 日頃の行事に協力、参加、とても助かっています
- 「釜ヶ崎に頑張っている団体がある」という情報を聞いてお邪魔させていただきました。街の住民の方は孤立して生活されている方が多いような印象を受けましたが、こちらの方々はみなさんで一緒に歌っていたり、とても楽しそうで見ていて嬉しかったです。農業も参加したいです！また遊びにきたいです。突然でしたが、コーヒーごちそうさまでした。楽しかったです。
- いつも顔を見れば、あいさつ等もしていただき、こどもたちも仲良くしていただき、とても助かります。いろんな人たちとのつながりはとても大事だと思います。皆様が持つ素敵な力をいろいろ、若い人たちにもつなげていってほしいと思うし,力を貸していただきたいと思います。これからも頑張ってくださいね！そして、地域を明るく元気に！
- ひと花センターさんと子どもたち（保育園児）が一緒に交流し、楽しむことができる行事にまた呼んでいただけたら嬉しいです。いつもありがとうございます。
- いつも本当にありがとうございます。子供たちだけでなく、大人にとってもおじさんたちの力はいつも便りになり、参加してくださること、楽しみにしていたり、みんなで過ごす場面を見ては、あたたかい気持ちになります。これからも「つながる」ことで町が明るくなったり、笑顔が増えたらいいなと思います
- 引きつづき、子どもたちとの交流の場をつくっていきたいです
- 拠点は必要と思います。ただ、山王こどもセンターからは少し距離があるので行き来するのは難しいです。ひと花スタッフからボランティア派遣の件を提案いただき、個人的なつながりにむすびつけられると良いと思っています。お互いにとって良い関係がうまれるようマッチングにも注意がいると思います→継続的な関係のために…
- だいじにだいじに育てましょう。ただしあまり肩に力を入れすぎないように（はりきりすぎないように）

＜居場所としての期待＞

- 私はみなさんがいきいきとされている、その姿を見て、何もしない人よりずっとかちがあり、ますますひと花センターが、われわれの居場所として発展してほしいです。感謝をこめて、心より思います。
- 社会の資源のひとつとしてのひと花さん、居場所と出番づくり（多世代の）よろしくお願いします。
- 単身高齢者にとって、毎朝目がさめても、一日何もすることがないのはつらく不健康である。その点、ひと花センターへ行って仲間とともに自分のできる範囲で人の役に立てたら、心身共に健康になり、生きがいも生まれると思います。ひと花センターの関係者のみなさま、大変ご苦労ですが、今後もがんばってください
- 地域高齢者の居場所として、気安く出入りができるように一度参加すると要領が得るのですか。
- 中だけじゃなく、紙だけじゃなく、声でもかけたら少しでも増えると思う。登録者が増えたら人も足りなくなるから、またアルバイト的な感じで声をかけたらいいと思います
- 地域にとけこんで楽しく一日一日を送れるように、自分の得意とするものをアピールすると良いと思う

＜希望や要望＞

- 生保以外で年金受給者の利用も可能であればもっと広がりがあるのでしょうか？孤独に生活されている方の憩いの場、人とのつながりの場があるのは、とても意義があると思いますので、これからもさらに発展を期待しております。他施設との合同の催しなどもあれば、より広く周知できるのかもしれません
- 宣伝が足りない。ひと花食堂を作ってみるといい。場所を借り、安価で食事を提供できるようにする。
- ぜひ継続してほしい。地域とのつながり強化しましょう。期待してます。
- 継続していくことが大事だと思います。たくさんの方に知っていただくとよいのでしょうか。また来させていただきたいです。よろしくお願いします。
- 健常者も障がい者も一緒に楽しくできることを願ってます
- おじさんたちががんばりすぎずにいられるように、何もできなくてもいられる場所であってほしいです。いつもみなさん楽しそうにいい雰囲気なので長く続いてほしいです
- なるべくたくさんの方が継続して参加できるような取組をお願いします。何か役に立ちたいと思っておられる方は多いので。
- お金がないので無料の誰でも参加できるイベントの回数を、たとえば月２回とか３回とか、ふやしてほしい
- 楽器教室、手作り教室、はいひんなどで楽器を作る教室も希望。
- なにわ区にもひと花さんつくってほしいです。
- ひと花センターの取組みは、費用対効果・短絡的な波及効果の評価ではすくいきれない変化を生み出しているように思います。ひとりひとりの全面的・マルチプルなケアを実践されていることに対して、容易に理解できるイメージ図等を用い、取組みの重要性を語れると、より理解をえやすいと思いました。

７．総括

ひと花センターに関する意識調査から、地域の人たちのもつひと花センターへの意識や評価が明らかになりました。回答者は、ひと花センターの催しイベントの参加者、支援系団体、非支援系団体、町会関連に分類できます。回答者の年齢は10代の若い人たちから80代まで多様な年齢層の人たちです。

ひと花センターは西成区が主管して実施されている事業ですが、市や区の広報紙などを通して活動を知る人はごくわずかで、多くの人が、人づてや地域の催しやまちづくり関連の活動を通してひと花の活動や催しに参加し作業の依頼をしています。回答者のうち約３割が、ひと花センターに作業の依頼をしたことがあり、作業の丁寧さや技術への評価もおおむね高く、約９割が再度作業の依頼をしたいと回答しています。また、催しやイベントの参加についても、再度参加したいと回答した人が7割以上確認できました。一度でも関わったことのある人たちのひと花の取組みへの評価が高いだけでなく、再度参加や依頼をしたいという希望も強いことからも、ひと花センターへの地域からの期待の大きさがうかがえます。

ひと花センターが開設したことが地域にどのような影響と変化をもたらしたかということについて、回答者の属性別（ひと花センターの催しイベントの参加者、支援系団体、非支援系団体、町会関連）の評価からは、以下の傾向が明らかになりました。

まず、ひと花センターの催しイベント参加者に関しては、ひと花ができて助かった、ひと花が地域のちからになっていると評価する人たちの割合の高さが目立っていました。このカテゴリーには、今後ひと花センターの登録者になる可能性のある人や登録者と年齢の近い60歳代以上の人たちが５割弱を占めることから、居場所利用の当事者意識の強さがうかがえます。

こうした当事者性とは反対に、支援の対象ではなく、また支援を主体としない活動を行っている地域の団体は、生活保護受給者のイメージの好転、単身高齢生活保護受給者と地域のつながり、地域イメージの変化、ひと花ができて助かった、と評価する割合が高く、ひと花を通して初めて生活保護受給者と関わることで、それまで持っていた生活保護受給者のイメージが大きく転換したことがうかがえます。これとは反対に、支援活動を主体としている団体では、かねてから生活保護受給者や地域と関わりを持ちながら活動しているので、ひと花をきっかけとして生

活保護受給者や地域のイメージが大きく変化するような傾向は確認できません。しかし､ひと花ができて助かった、ひと花が地域のちからになっている、と評価する割合が高いので、支援活動の連携・協力のパートナーとしてひと花センターを高く評価していることがわかります。

町会関連の人たちは、ひと花ができて助かった、地域のイメージの変化を高く評価していますが、ひと花ができたことによる変化について、“わからない”と回答する割合が他の属性と比べて軒並み高いので、支援をめぐる当事者との関わりが限られ、また地域資源に接する機会が少なく、活動そのものへの認知が低いことを表しているのかもしれません。

ひと花センターの位置する地域は、あいりん地域（釜ヶ崎）であり、日雇労働者やホームレス、生活保護受給者への支援活動が活発に実施されてきた地域です。こうした特異な地域的条件がもたらした地域資源の豊かさを一つの強みにしながら、地域の支援団体との協力と連携を維持しつつ、新たな取組みや今後のひと花センターの事業の展開に活かしていくことが重要な課題になってくると考えられます。しかし、西成区までスケールをひろげて考えると、市民にとって支援の当事者となったり、支援の現場に日常的に接したりする機会は多くありません。そうした人たちに対して、ひと花センターの活動の意義や役割を認識してもらうような機会を増やしていくこともまた重要な課題の一つになってくるでしょう。

Ⅳ．２つの調査から導きだされる課題

「ひと花センター登録者実態調査」と「ひと花センターに関するアンケート調査」の２つの調査の結果から導きだされたひと花センターへの評価や今度の課題について簡単に述べて、まとめにかえます。

１）登録者の加齢と健康リスクへの対応

ひと花センターの登録者は全員高齢であり、今後、加齢に伴いさらに健康状態が悪化していくことは十分に考えられます。常用外の人たちがひと花から足が遠のいたいちばんの理由は体調の悪化でした。常用外の人たちのように孤立リスクが高い人の健康状態が悪化した場合、また孤立していなくても健康悪化リスクのある人たち、そうした人たちに対しては、健康を損なわないための日常的な対策と病院への適正な受診を組み合わせることで、持病や慢性疾患の症状の重篤化を予防する対策がのぞまれます。仮に、健康状態が損なわれた状態においても、つながりのある人たちの目が届くような緩やかな見守りがあれば、孤立や症状の重篤化が予防できる可能性もあります。ひと花センターの運営には訪問看護の事業所も関与しているので、こうした支援を専門とする関係機関と連携しながら、訪問事業等による緩やかな見守り体制の構築なども今後の取組みの一つの課題になっていくと考えられます。

２）帰属意識とつながりをもたらす場の意義

常用の人たちは、自己有用感の希望と実際のギャップが常用外の人と比較して小さく、そして、居場所としてのひと花への意識も､ひと花に関わる人たちの中でじっくりと関係を築きながら､自らが安心できる場所を作り上げ､帰属意識や仲間意識を高めていることがわかりました。さらに、継続して利用している人たちの中には、ひと花センターを利用したことで生活全般においてポジティブな変化を感じている人が多くいます。小さな目標を持ち、生活保護の範囲内で自らの生活を整え、組み立てていく力を身につけている人もいます。居場所を得たことや自己有用感を高めること、さらに自分の体調や生活を整えることができる場所としてひと花センターは十分に機能していることがわかります。

また、調査対象者の約7割がひと花センターの長期継続をのぞんでいます。居場所としてのひと花センターでも、たまに立ち寄る場所としてのひと花センターでも、ひと花センターがそこにあり、単身高齢の生活保護受給者に広く間口をひろげ、いつでも迎え入れてくれるような場であることが、常用、常用外に関わらず多くの登録者に安心を与えていると考えられます。地域の役に立つ、人と交流する、仲間をつくるといった外との関わりのこと、そして、生活や体調を整えていくという自分自身の身の回りのこと、この２つの往還がポジティブなスパイラルを生み出し、生活保護受給者が孤立せずいきいきとした生活ができるようになるまでには十分な時間が必要です。そのためにも、ひと花センターが長期的に継続することがのぞまれます。

３）生活保護受給に対する意識をときほぐす

登録者の中でも特に常用外の人たちに、生活保護受給へのネガティブなイメージが、その人自身のふるまいや人や地域との接し方を萎縮させ、それがその人の孤立を高めてしまう可能性が顕著に現れていることがわかりました。こうした人たちと接点を持つことはいろいろな工夫が必要かもしれませんが、例えば、体の調子が悪い時には病院を受診すること、ひと花センターにいつでも通えること、地域の役に立ってもいいことなど、すべての生活保護受給者に生活が保障され、受け入れられ、活躍できる場所があることを理解してもらうことが重要です。登録者自身が持つ生活保護受給に対するネガティブな感情を解きほぐし、自己を尊重し肯定する手助けをすることも、孤立を防ぐためには大切なことかもしれません。

また、生活保護受給者自身の否定的な感情だけではなく、世間からの生活保護受給者への批判的な見方も近年強まっている中で、ひと花センターのような取組みを維持していくのは大変なことです。ひと花センターの空間の維持、支援する職員、その他運営に関することには、多くのコストがかかってきます。しかし、こうした空間や機能にコストをかけない場合、時間と暇をもてあました生活保護受給者はこもりがちになり、ギャンブルやお酒などの依存症の重篤化が経済的な破綻と健康状態の悪化をもたらし、生活保護費が適正に使用されないだけでなく医療費も増大することが予測されます。その結果、生活保護受給者の孤立度が高まり地域も荒廃する、という負のスパイラルが別の社会的コストを生み出します。どちらのコストを選ぶのかは、最終的には行政や市民の選択に委ねられることなのかもしれません。しかし、ひと花センターの取組みは今回の調査からも明らかなように、現に地域への波及効果を少なからずもたらしています。ひと花と地域の新たな交流の中で生まれるなごやかであたたかみのある雰囲気は、コスト換算では表現できないつながりの豊かさやそれによって生まれる地域の力の可能性を感じさせ、そこには地域の荒廃という言葉が入り込む余地はありません。ひと花センターが地域にとってもかけがえのない場所になりつつあることは明らかです。生活保護受給者のエンパワーの場としてだけでなく、地域を巻きこみ、地域のちからを引き出していくような可能性も、今後のひと花センターの役割として期待できるのかもしれません。

ひと花プロジェクト　調査結果から今後の事業の継続性を展望する

水内俊雄（大阪市立大学　都市研究プラザ／文学研究科地理学専修）

▼事業の意義の再確認

改めて確認することになるが、西成区には高齢単身で家族をはじめとする公私のセーフティネットを有さない高齢者が、全国最大の規模と密度で集住している。少子高齢化という言い古された地域課題ではあるが、どちらも激しく進行している西成区では、深刻な高齢化の加速がもたらす課題に先進的に地域として取組み試行事例を提供する使命を有する。その使命を西成特区構想を通じて具体化した事業が、「西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」、愛称「ひと花プロジェクト」である。本事業のめざすところは、支える地域コミュニティ自体が弱体化する中での、新たなコミュニティ再興の担い手づくりでもある。スタートアップとして厚労省の補助金を利用し、今後を展望するにあたり、本事業の効果の政策的吟味と、市が担ってゆく今後の事業継続の可能性の追究を簡単に行っておきたい。

類　　型	類型の特徴と支援の方向性	割合（重複ケースあり）
就労自立	年齢が相対的に若く、就労意欲の高いグループ。また、居宅保護開始からの日が浅く、体調が良好で傷病の程度も軽い。就労以降のアフターフォローが重要。	2%
福祉的就労	半福祉半就労で仕事をしながら収入を得て、不足する生活費・住居費を生活保護費から補助。加齢による体調の変化などに合わせて仕事量を調整。	19%
ボランティア	年齢的、体力的な問題で、就労まで至らないグループを対象。シルバー人材センターやボランティアセンター、地域活動のサークルなどを通した有償ボランティアなどへの参加。外部とのコミュニケーションの活発化を促すだけでなく、地域的な貢献度も高い。	32%
社会的自立	居宅保護受給以降、自宅にこもりがちの生活をしており、就労意欲が低く、日常生活も活発ではないグループを対象に、社会的自立に結びつく支援を提供。年齢や体調を考慮しながら、地域活動やボランティアなどのプログラムを利用し、社会への再参加を促す。	19%
日常生活自立	傷病による入退院を繰り返す人や、障害のある人、また、アルコール、ギャンブルなどの問題で野宿生活にスリップする可能性のある人を対象に、日常生活における支援を提供。再野宿化の防止となる支援が求められる。	30%

出典：大阪市健康福祉局保護課・西成区保健福祉センター『大阪市西成区の生活保護受給者の現状』2006 年 3 月

▼今回対象者の位置づけ

2005年に『大阪市西成区の生活保護受給者の現状』という調査を、当時の大阪市健康福祉局・西成区保健福祉センターが高齢受給者を対象に行っている。ここで右図のような「就労自立」や「生活自立」の指標からみた高齢受給者に対する支援法方向性を、推計をもとに提言している。

本事業の対象者は、西成の福祉部門での推薦を経て、特に「福祉的就労」、「ボランティア」、「社会的自立」類型を中心とし、少数であるが金銭管理プログラムにみられる「日常生活自立」層の方も利用していると予想される。その％値は、前者3類型のみをあわせても70％を占めることになる。すなわちこの事業の拡がりは、西成区の高齢生活保護受給者の多数派にある点である。

安定した生活保護による居宅生活をどのように維持してゆくかという観点から、大きな母集団の一部で、最初の一歩を踏み出したところに意義があることをまず確認しておきたい。

▼事業参加への満足度、有用感

報告書の丁寧な分析以上に付け加えることはないが、このようにクリアにポジティブな評価値が出てくることは稀である。参加していることの意義や事業への評価は総じて高く、参加している人々の事業への期待は高い。しかし自分自身の評価として社会のために役立っているかという自尊感情に関わるところでは、まだ十分達成されているとはいえない。地域にどのような活力を与えるか、また住民による相互扶助や互助に関わる課題であり後述する。

▼地域からのバックアップ

この事業に直接ボランティアの依頼や支援メニューの提供を行っている、あるいは何らかの形でバックアップしているサポーターが感じる、事業の意義、依頼したボランティアの質に対する評価も高くなっている。あいりん地域は長らく、既存の地域組織ではなかなかサポートしにくい、流動性の高い人々の居住エリアであり続けてきたが、生活保護受給をきっかけに、こうした人々が数多く地域の住民として根付き始めた。地域に定着し始めた人々の自らの力付けに、地域も動く構図である。あいりん地域にはさまざまな支援の民間組織、NPOがあり、事業サポートにそうしたなりわい型の地域資源がうまく動員された。さらに、町会や一般住民のボランタリーな参画もあり、地域全体で事業を支える多様な体制が、ひと花事業をきっかけに始まったことも重要である。地付きの地域組織もこの事業で新たなコミュニティ組織化、ネットワーキングの手法を獲得したともいえよう。まさに地域力の増進である。

▼事業参加が継続していない層

もちろんすべての人がうまく継続してこの事業に乗っているわけではなく、継続参加しなくなった層もかなりいる。最大の要因は健康、体調の悪化であり、このことは前頁表の最下段にある「日常生活自立」に支援を要する層として、別の支援の必要性が生まれてくる。これは本事業の守備範囲外であるが、制度下にある医療・介護などとのその後の連携は当然である。在宅での互助や地域でのこうした層へのサポートという新たな体制も必要とされる。その意味で本事業はアフターケアのきっかけにもなるという点で、個人との関係づくりに重要な役割を果たしていることになる。

▼事業効果の説明責任

生活保護受給を前提に居宅保護の人々の安定した生活をサポートする意義は何であろうか？生活保護を活用しながら就労している者のうち、前頁表の「ボランティア」類型に近い形でゆるやかな就労に関わるような形態を「社会参加型就労」と呼ぶ場合*注1、まさしくこのような就労形態にアクセスできた、実現できたことが、本事業の最大の成果と言えよう。そして、浪費を避け依存症にもつながる支出を適度に抑え、ネガティブな消費から社会的理解を得られやすいポジティブな消費が加味される方向へと転換されたこと。また、適切にそして適度に医療にもかかり、医療との上手なお付き合いの積み重ねにより、たとえ入院に至った時にも丁寧な対応が生じ、当然普段の健康も維持されている姿がみえてくる。また依存症になるほど飲酒の多い人では、大きな病気にかかることが多く、医療費は増えるので、その意味でもそうした負のスパイラルを防ぐ役割も果たしている。

介護や医療を本格的に必要とされる場合には、より多くの公的な費用がかかってくる。そうした状況になる時期をなるべく先延ばしし、介護や医療に比して低廉な生活保護でなるべく健康を維持し安定した生活を続けてゆくことに、本事業が役割を果たしている側面も見て取れる。

一方、健康を害することにより、この事業への参加から遠のき、別の支援メニューが必要となってきた時に、要支援者との面談やサポートから得られる前もっての情報は、迅速で適切なケアにつながる可能性をもたらしてくれる。ケースワーカの業務のアウトソーシングにもつながり、制度下の支援につなげてゆく役割も果たしていることにもなる。制度の狭間でぎりぎりの生活を送っておられる層を適切に掘り起こし、自立的生活の安定した継続に本事業の果たしている役割は大きい。

地域で支えるという観点を徹底すれば、あいりん地域で生活支援をなりわいとする組織と地域組織が一体となった、より自立的な組織の確立が今後必要となってこよう。事業の透明性の確保といった実施主体のマネジメント力の向上と、支える人材のボランタリーな参画と育成が、今後の事業継続のカギとなろう。

注1：『生活困窮者支援の持続可能性とその効果を測定するパネル調査』（インクルーシブシティネット、2013年3月）によると、全国のホームレス支援団体により脱ホームレス支援を受けた後、単身で地域生活に移行した、あるいは何らかの形で支援後の生活を送っている者のうち、56.1％が「生保のみの非就労」、8.1％が「社会参加型就労」、16.7％が「半就労・半福祉」、19.2％が「生保なし就労」、という調査結果を得ている。ここで取り上げている社会参加型就労は、生活保護を利用しながら就労している者のうち、就労から得る収入が時間当たり最低賃金水準未満しか支払われていない働き方として定義している。ただ実際のところほとんどが無償、あるいは交通費程度の有償ボランティアである。ひと花事業は、非就労からこうした社会参加型就労に導く重要なサポートを提供しており、8.1％という数をどのように増やしていくかが、日本全体の課題であることが判明するとともに、この事業の先進性を一般化する必要があろう。